（様式）

文部科学省

「地域社会に根ざした高等学校の

学校間連携・協働ネットワーク構築事業

（ＣＯＲＥハイスクール・ネットワーク構想）」

令和５年度 成果報告書

宮城県教育委員会

1. 事業概要

1.1. 本事業に取組む課題と目的

（１）　本事業に取り組む背景（本県の現状と課題）

本県は仙台圏への人口の一極集中が顕著であり、仙台圏以外のいわゆる郡部の人口流出に歯止めがかからず、これはネットワーク構成校の受信校として選定した高等学校の所在地の自治体も同様である。（**表１**）本教育委員会においても、１５歳人口の減少を見据えて、高等学校の統廃合や学級減を進めている。しかし、郡部の高等学校では定員充足率が低い。（**表２**）今後、さらに統廃合が進み、地域から高等学校が無くなることは、地域の教育環境を失うに止まらず、地域の経済や人材確保に大きな影響を及ぼし、人口流出に一層の拍車をかけるものと考えられる。

ネットワーク構成校名	市町名	平成２２年	平成２７年	令和２年
宮城野高校（配信校）	仙台市	1,045,986	1,082,156	1,096,704
田尻さくら高校（配信校）	大崎市	135,147	133,391	127,330
貞山高校（配信校）	多賀城市	63,060	62,096	62,827
柴田農林高校川崎校	川崎町	9,978	9,167	8,345
岩ヶ崎高校	栗原市	74,932	69,906	64,637
中新田高校	加美町	25,527	23,743	21,943

表１　ネットワーク構成校の所在地自治体の人口（人）（出典：総務省）

年　　度	令和２年度		令和３年度		令和４年度		令和５年度	
ネットワーク構成校名	定員	充足率	定員	充足率	定員	充足率	定員	充足率
宮城野高校　（配信校）	280	100.0	280	97.9	280	100.0	280	100.0
田尻さくら高校　（配信校）	120	45.0	120	49.2	120	45.0	120	55.0
貞山高校　（配信校）	160	33.8	160	56.9	160	28.1	160	47.5
柴田農林高校川崎校（受信校）	40	55.0	40	65.0	40	47.5	40	52.5
岩ヶ崎高校　（受信校）	120	55.8	120	35.8	80	37.5	80	30.0
中新田高校　（受信校）	120	76.7	120	56.7	120	77.5	120	60.0

表２ ネットワーク構成校の定員充足率 定員（人）　充足率（%）

第２期宮城県教育振興基本計画（計画期間：平成２９年度から令和８年度まで）においては、「郷土を愛する心と社会に貢献する力の育成」を教育施策の基本方向の１つに掲げ、「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛する態度を養い、国際的視野を持ち世界に通用する人づくり」や「地域振興・活性化を目指す地方創生及び我が国や郷土の発展に向けて、宮城の将来を担う人づくり」を進めている。地域社会に根ざす高等学校においては、生活圏のフィールドとする地域探究学習を充実させ、探究の手法を生徒に身に付けさせるとともに、地域との関わりを深めることで地域創生に資する人材の育成が求められている。

（２）　本事業に取り組む目的

サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を融合させ、経済的な活性化と社会的な課題解決を目指す新たな社会 Society5.0 の実現とその社会を支える人材育成のために、公的サービスの提供のための手段としてＩＣＴのもつ機能を最大限活用し、都市部への人的資源の一極集中の是正と地方創生という大きな課題に対しての教育分野のアプローチ・研究と位置付け、本県では仙台圏と郡部の教育機会の格差の解消を目指し、遠隔授業の在り方についての調査研究と郡部の高等学校における地域探究を柱とするカリキ

ュラムについての調査研究をし、地域に貢献する人材を育成する。県内の地域間格差を解消する手立てとしてＩＣＴの活用を有効な手段と捉え、仙台圏の学校と郡部の学校、郡部の学校間での教育課程の共通化や学校間交流を図り、宮城県内のどこにおいても生徒の多様なニーズに応える教育体制を模索したい。

1.2. 本事業を通して明らかにしたい事項

１．１.本事業に取り組む目的で述べたことを具現化するために、下記のことについて調査研究を行った。

（１）　遠隔授業の実施やその運営体制に関する取組

イ　調査研究テーマ

遠隔授業における「協働的な学び」の実践の在り方

ロ　検証内容

遠隔教育において「主体的、対話的で深い学び」を実現し、生徒の資質・能力の育成を図るため、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に資する実践の在り方を検証する。

（２）　コンソーシアム構築による教育の高度化・多様化に関する取組

イ　調査研究テーマ

学校コンソーシアムと協働した地域探究活動

ロ　検証内容

高等学校が地域創生の核となるための、学校コンソーシアムと学校の協働を支援する管理機関の関わり方を検証する。

1.3. ロードマップ

（１）　３年間の調査研究の概要

令和３年度から３年間、以下の実証研究を進めた。

イ　配信側の高校の教育課程において特長のある教科・科目（芸術や学校設定科目）を受信側の教育課程にも設定し、仙台圏以外の学校でも多様な教科・科目の選択を可能にするとともに、配信側と受信側の教員の連携により、生徒の学習進度に応じた習熟度別授業を展開する。

ロ　ネットワーク構成校教員と指導主事による連絡協議会を定期的に開催し、学校間連携を円滑に行う仕組みを構築する。

ハ　教育委員会、大学、市町村、商工会等からなるコンソーシアムを構築し、構成機関が生徒の地域探究の学習活動や成果の普及に関わる仕組みを構築する。

ニ　受信校の生徒が探究活動を通して地域の課題とその解決策の提案に取り組む中で、次のような資質・能力を育成する。

- 地域の特長と課題を見いだし､特長を生かした課題解決を探究することで育成される｢分析する力｣と「構想する力」
- 他校との交流や情報共有、成果発表に取り組むことで育成される自分たちの地域を「発信する力」と「客観化する力」
- 地域の探究も含め、地域と関わる中で積極的に「社会参画する力」

ホ　３年間の実施計画

令和３年度	第１回 ＭＤＣＣ連絡調整会議 第１回 受信校コンソーシアム会議 ＩＣＴ機器の選定 令和４年度入学生の教育課程の決定（各構成校） 遠隔授業を行う科目の決定 遠隔システムの設置　（※適宜 ＣＩＯ 指導主事訪問） 遠隔授業教員研修会 遠隔システムの試行 教育課程外でのネットワーク活用 研究成果報告・発表 本事業に係る成果普及（受信校） 第２回 受信校コンソーシアム会議 第２回 ＭＤＣＣ連絡調整会議
令和４年度	遠隔授業の本格実施（５科目） 第１回 ＭＤＣＣ連絡調整会議 第１回 受信校コンソーシアム会議 遠隔授業教員研修会　（※適宜 指導主事訪問） 第２回 ＭＤＣＣ連絡調整会議 研究成果報告・発表 本事業に係る成果発信 第２回 受信校コンソーシアム会議 第３回 ＭＤＣＣ連絡調整会議
令和５年度	遠隔授業の本格実施（７科目） 第１回 ＭＤＣＣ連絡調整会議 第１回 受信校コンソーシアム会議 遠隔授業教員研修会　（※適宜 指導主事訪問） 第２回 ＭＤＣＣ連絡調整会議 研究成果報告・発表 本事業に係る成果発信 第２回 受信校コンソーシアム会議 第３回 ＭＤＣＣ連絡調整会議

2. 遠隔授業の実施やその運営体制に関する取組

2.1. 調査計画

令和５年度の調査研究事業（遠隔授業の実施やその運営体制に関する取組）の実施計画については、下記のとおりである。

令和５年度調査研究事業の実施計画

年　月	実施内容
５年４月	遠隔授業研修会・ＣＩＯ学校訪問 遠隔授業の本格実施開始
５月	第１回ＭＤＣＣ会議 第１回学校コンソーシアム会議（各受信校）
６月	第１回みやぎ探究メソッド研修会（探究活動研修会） 遠隔授業研修会
９月	遠隔授業研修会兼遠隔授業成果発表
１０月	第２回みやぎ探究メソッド研修会（探究活動研修会）
１２月	第２回ＭＤＣＣ会議 受信校活動報告会兼生徒交流会
６年１月	総合的な探究の時間の成果発表会（受信校） 高校生フォーラム発表（受信校の探究活動を発信） 第２回学校コンソーシアム会議（各受信校）
２月	遠隔授業成果発信 第３回みやぎ探究メソッド研修会（探究活動研修会） 第３回ＭＤＣＣ会議

※遠隔授業に関わる項目については、下線を引いている。

2.2. 実施体制

（１）　ネットワーク構成校

本県は配信校を令和５年度より１校増やして３校とし、受信校３校と合わせて計６校でネットワークを構成した。

イ　宮城野高等学校

本高校は普通科、総合学科、美術科の３学科で構成される単位制の高校であった。 令和４年度入学生からの新学習指導要領の完全実施に合わせて、普通科と美術科の２学科に改編され、単位制高校として学習意欲の高い生徒のニーズに応じた科目を多く設定している。本高校からの授業配信により、郡部の小規模校において学習内容の理解の早い生徒と遅い生徒のニーズに応える習熟度別授業や多様な教科・科目の展開が可能となることから配信校（コア校）として構成校に選定した。

ロ　田尻さくら高等学校

本高校は定時制の普通科、単位制の高校であり、様々な学習歴、多様な進路希望をもった生徒の自己実現を可能にする学校である。普通科ではあるが、福祉や商業などの教科や韓国語や中国語などの学校設定科目も履修できるため、多様な生徒の興味関心に応じた授業が提供できる。本高校からの授業配信により、郡部の小規模校において教員数の関係で設定しにくい専門科目や多種多様な学校設定教科・科目等の選択が可能になることから配信校（コア校）として構成校に選定した。

ハ　貞山高等学校

本高校は定時制の普通科、単位制の高校であり、様々な学習歴、多様な進路希望をもった生徒の自己実現を可能にする学校である。普通科ではあるが、家庭、商業、情報などの専門教科やコミュニケーション・手話、中国語などの学校設定科目も履修できるため、多様な生徒の興味関心に応じた授業が提供できる。本高校からの授業配信により、郡部の小規模校において教員数の関係で設定しにくい専門科目や多種多様な教科・科目等の選択が可能になることから配信校（コア校）として構成校に選定した。

ニ　岩ヶ崎高等学校

本高校は「総合的な探究の時間」において栗原市役所栗駒総合支所や鶯沢栗駒商工会と連携した学習を行っており、本高等学校を「栗原市役所岩高支所」として、地域の抱える課題に関する探究活動を実践してきた。これまで地域の大学進学を目指す生徒を集め、大学進学希望者のニーズに応える教育活動が実践されてきたが、 近年、地域の生徒数の減少が著しい。今後も地域社会に根ざした学校として、大学進学希望者をはじめとする生徒の多様なニーズに応える教育活動を展開するために受信校として構成校に選定した。

ホ　中新田高等学校

本高校は「総合的な学習の時間」に加美町役場や加美町商工会と連携した地域学 習を行っており、新教育課程の「総合的な探究の時間」となってからは、加美町の課題とその解決に向けた探究学習を実践しており、地域との連携が進んでいる。加美町が本高校の全国募集の実施を県教育委員会に働きかけるなど、町からの本高校への期待は大きい。大学進学を希望する生徒がいる一方、地元企業への就職を希望する生徒もおり、生徒の多様なニーズを実現するために受信校として構成校に選定した。

ヘ　柴田農林高等学校川崎校

本高校は柴田農林高校の分校であり、普通科で農業科目を設置する全国でも珍しい高校である。１学年２クラス編成であったが、平成２０年から１学年１クラスと なった。川崎町唯一の高校として、地域社会に根ざした学校として歩んでおり、地域からも期待され、保護者や地域へのアンケートでは進学希望にも就職希望に対応した学校を望む声が多く、多様な授業ニーズを潜在的にもつ高校であることから受信校として構成校に選定した。

（２）　みやぎＤＵＡＬ－ＣＯＲＥハイスクールネットワークコンソーシアム

本県では事業全体を総括する組織として、みやぎＤＵＡＬ－ＣＯＲＥハイスクールネットワークコンソーシアム（以下、ＭＤＣＣという）を組織した。高等教育機関、行政機関、遠隔授業配信校、受信校が構成する探究の学びのための学校コンソーシアムを構成団体としており、学校コンソーシアムに対して親コンソーシアムの役割ももつ。ＭＤＣＣを組織するために制定した規約を４５ページから４６ページに掲載した。

規約では「みやぎハイスクールネットワーク構築事業を連携・協働して実施するにあたり、連絡・調整するための会議を開催する。」としており、各学校の抱える課題やその対応策について構成校全体で共有でき、事業の具体を明確にすることができた。高等教育機関からは、東北学院大学　教授　稲垣忠　先生、宮城学院女子大学　准教授　舛井晴道　先生に参加いただき、遠隔授業推進の在り方や探究活動を通して育成された資質・能力を活用することでの学びの広がりについて助言をいただいた。

2.3. 取組概要

（1）実施日程

月	実施内容
令和５年４月	各学校での遠隔授業受信開始 中新田高校 ・学校設定科目「地域産業Ⅰ」授業開始 ・学校設定科目「地域スポーツ学（カヌー)」授業開始 ・学校設定科目「地域防災学Ⅰ」授業開始 柴田農林高校川崎校 ・岩沼高等学園川崎キャンパス連携校内行事開始 管理機関 ・遠隔授業研修会①
５月	中新田高校 ・地域産業Ⅰ　加美町商店街フィールドワーク ・地域産業Ⅰ　第一次産業見学（学校コンソーシアム委員の牛舎） ・第１回学校運営協議会 柴田農林高校川崎校 ・岩沼高等学園川崎キャンパス連携防災訓練 管理機関 ・第１回みやぎＤＵＡＬ－ＣＯＲＥハイスクールネットワークコンソーシアム連絡・調整会議 ・指導主事による中新田高校（科学と人間生活)、田尻さくら高校（科学と人間生活）への遠隔授業視察（ＣＩＯ訪問の代替）
６月	岩ヶ崎高校 ・「第１回 Iwagasaki Jimoto 大学」開催 中新田高校 ・地域産業Ⅰ　第三次産業見学（学校コンソーシアム委員　加美町振興公社） ・加美町主催スポーツイベント「ツール・ド・３４７」運営ボランティア参加 柴田農林高校川崎校 ・第１回地域と川崎校の連絡「実務者連絡会」 ・川崎町学務課連携活動 ・川崎町連携全校ボランティア活動 ・川崎町地域振興課連携活動 管理機関 ・第１回探究活動研修会 ・先進校視察（広島県教育委員会事務局　学びの変革推進部 高校教育指導課、広島県立福山誠之館高等学校、 広島県立油木高等学校、広島県立東城高等学校）
７月	岩ヶ崎高校 ・岩高探究ツアー（防災・減災編） ・地域行事ボランティア

	中新田高校 ・２学年総合的な探究の時間　インターンシップ ・地域防災学Ⅰ　学校コンソーシアム委員（加美町危機管理室）による出前授業 ・加美町ドラゴンカヌー大会参加 ・第１回学校運営協議会（第一部会） 柴田農林高校川崎校 ・釜房みどりの園１学年ボランティア活動 ・川崎町地域おこし協力隊（SPRING）による１年生「総合的な探究の時間」助言 ・ＮＰＯ川崎町の資源をいかす会による１年生「総合的な探究の時間」助言 管理機関 ・遠隔授業研修会②
８月	岩ヶ崎高校 ・第１回岩ケ崎高等学校コンソーシアム ・コンソーシアム委員よる３年生「総合的な探究の時間」探究成果発表会における指導・助言 ・Iwagasaki English Camp ・地域行事ボランティア 中新田高校 ・模擬面接（学校コンソーシアム委員を含めた同窓会・PTA 主催） ・学校コンソーシアム委員を含めた社会人を講師とする「志ゴトーク（２学年)」 ・地域スポーツ学Ⅰ（ロードバイク）授業開始 ・地域防災学Ⅰ　救命救急講習受講 柴田農林高校川崎校 ・川崎町生涯学習課連携活動 ・川崎町地域振興課連携活動 ・川崎町社会福祉協議会連携活動 ・ＮＰＯ学校サポートネットワーク連携活動 管理機関 ・指導主事による田尻さくら高校（地理総合、科学と人間生活、美術Ⅰ）への遠隔授業視察
９月	岩ヶ崎高校 ・「第２回 Iwagasaki Jimoto 大学」開催 ・大学教員を招いての国際交流、国際理解に係る講話 中新田高校 ・学校コンソーシアム委員を含めた社会人を講師とする「志ゴトーク（１学年)」 ・第１回学校運営協議会（第二部会） ・個人プロジェクト発表会 柴田農林高校川崎校 ・川崎町地域おこし協力隊（SPRING）による１年生「総合的な探究の時間」助言 管理機関 ・遠隔授業研修会③兼遠隔教育成果発表 ・指導主事及びコンソーシアム構成員である大学教員による中新田高校（科学と人

	間生活）への遠隔授業視察
１０月	岩ヶ崎高校 ・岩高探究ツアー（歴史・文学・まちづくり編） 中新田高校 ・加美町合同水難救助訓練参加 ・加美町主催スポーツイベント「Sea to Summit in 加美」ボランティア参加 ・文化祭において HP「加美町お仕事図鑑」発表会、ドローンショー公開 ・地域防災学Ⅰ　学校コンソーシアム委員よる（消防団）による出前授業 ・加美町秋まつりフリーマーケット出店 柴田農林高校川崎校 ・川崎町学務課連携活動 ・川崎町生涯学習課連携活動 ・川崎町社会福祉協議会連携活動 ・ＮＥＸＣＯ東日本連携生徒会活動 管理機関 ・指導主事による宮城野高校（地理総合、地学基礎）への遠隔授業視察 ・第２回探究活動研修会 ・地域協働・コンソーシアムに関する訪問調査（中新田高校） ・遠隔授業に関する訪問調査（宮城野高校）
１１月	岩ヶ崎高校 ・第２回岩ヶ崎高等学校コンソーシアム ・コンソーシアム委員よる２年生「総合的な探究の時間」探究活動中間発表会における指導・助言 ・ＥＵがあなたの学校にやってくる ・地域行事ボランティア ・公式ＳＮＳを開設し、探究活動の発信開始 中新田高校 ・第２回学校運営協議会（第一部会） ・地域産業Ⅰ　課題提案型「加美町プロジェクト」授業開始 柴田農林高校川崎校 ・川崎町福祉課及び社会福祉協議会連携活動 管理機関 ・指導主事及びコンソーシアム構成員である大学教員による宮城野高校（数学Ｂ）への遠隔授業視察 ・遠隔授業研修会③兼遠隔教育成果発表
１２月	岩ヶ崎高校 ・みやぎのこども未来博ポスター発表会参加 中新田高校 ・みやぎのこども未来博ポスター発表会参加 ・第２回学校運営協議会（第二部会） ・地域スポーツ学Ⅰ（ボルダリング）授業開始 柴田農林高校川崎校

	・みやぎのこども未来博ポスター発表会参加 管理機関 ・みやぎのこども未来博ポスター発表会（受信校活動報告会兼生徒交流会）
令和６年１月	岩ヶ崎高校 ・コンソーシアム構成員である大学教員及びゼミ生１年生「総合的な探究の時間」における指導・助言 ・みやぎ高校生フォーラムパネルディスカッション代表生 ・先進校視察（郁文館高校、佼成学園高校） 中新田高校 ・みやぎ高校生フォーラム代表校発表 ・地域スポーツ学Ⅰ（ウィンタースポーツ）授業実施 ・地域産業Ⅰ「加美町プロジェクト」提言発表会 ・「加美町研究」発表会 ・「加美町プロジェクト」発表会 柴田農林高校川崎校 ・カワサキクエスト（総合的な探究の時間）中間発表会 ・第２回地域と川崎校の連絡「実務者連絡会」 管理機関 ・高校生フォーラム発表（受信校の探究活動成果発信）
２月	岩ヶ崎高校 ・第３回岩ヶ崎高等学校コンソーシアム ・コンソーシアム委員よる１年生「総合的な探究の時間」探究活動成果発表会における指導・助言 ・外部講師を招いての「職員対象探究研修会」 中新田高校 ・第２回学校学校運営協議会 ・宮城県雪合戦大会参加 ・第２２回うめぇがすと鍋まつり in 加美　出店、親子イベント実施 柴田農林高校川崎校 ・カワサキクエスト（総合的な探究の時間）成果発表会 管理機関 ・第３回探究活動研修会 ・高校生フォーラム発表（受信校の探究活動成果発信）
３月	岩ヶ崎高等学校 ・コンソーシアム委員よる２年生「総合的な探究の時間」探究活動成果発表会における指導・助言 柴田農林高校川崎校 ・社会福祉協議会連携活動 管理機関 ・遠隔教育成果発信

※遠隔授業システムを活用した教育課程外の取組については、アンダーラインを引いている。

2.3.1. 遠隔授業実施表 a

配信拠点	受信校	教科名	科目	開設学年	配信校生徒の有無	遠隔授業実施理由	受信側の配置体制	遠隔授業実施回数/全授業回数
宮城野高校	岩ヶ崎高校	地理歴史	地理総合	2	無	専門性	教諭	62/64
宮城野高校	岩ヶ崎高校	理科	地学基礎	2	無	専門性	教諭	64/66
宮城野高校	中新田高校	数学	数学Ａ	2	無	習熟度	実習助手	47/50
宮城野高校	中新田高校	数学	数学Ｂ	3	無	習熟度	実習助手	43/45
田尻さくら高校	柴田農林高校川崎校	地理歴史	地理総合	2	無	専門性	教諭	56/64
田尻さくら高校	中新田高校	理科	科学と人間生活	3	無	習熟度	実習助手	43/45
田尻さくら高校	柴田農林高校川崎校	理科	科学と人間生活	1	無	習熟度	教諭	43/51
田尻さくら高校	岩ヶ崎高校	芸術	美術Ⅰ	1	無	免許外	教諭	60/62
貞山高校	柴田農林高校川崎校	情報	情報Ⅰ	2	無	免許外	教諭	47/51

2.4. 取組内容

イ　９科目において、遠隔授業を実施。（図１から８）

図１　数学Ａ、Ｂの配信の様子
（配信校：宮城野高等学校）

図２　情報Ⅰの配信の様子
（配信校：貞山高等学校）

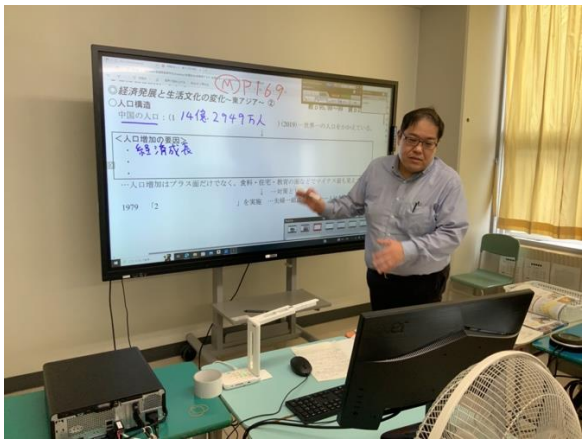


図３　地理総合の配信の様子
（配信校：宮城野高等学校）

図４　地理総合の配信の様子
（配信校：田尻さくら高等学校）

図５　科学と人間生活の配信の様子
（配信校：田尻さくら高等学校）

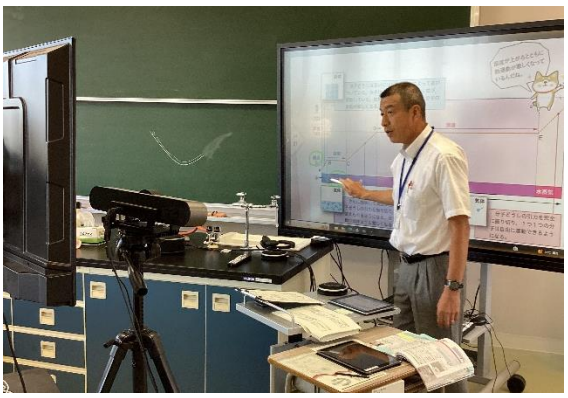


図６　科学と人間生活の配信の様子
（配信校：田尻さくら高等学校）

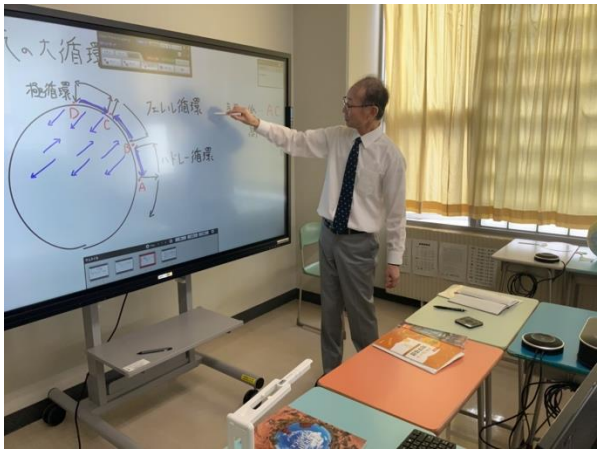


図７　地学基礎の配信の様子
（配信校：宮城野高等学校）

図８　美術Ⅰの配信の様子
（配信校：田尻さくら高等学校）

イ　遠隔授業研修会①を実施

期日：令和５年４月４日（月）

内容：講義・演習①「授業における効果的なＩＣＴの活用」

講義・演習②「Google Classroom を活用した課題の配信・提出〔生徒側〕」

講義・演習③「Google Classroom を活用した課題の配信・提出〔教師側〕」

講義・演習④「Google Workspace for Education を活用した教科等横断的な学習の事例」

講師：宮城県石巻西高等学校　教諭　尾形　大

ロ　遠隔授業研修会②を実施

期日：令和５年７月１１日（火）

内容：講義「ポートフォリオを活用した学びについて」

講師：東北学院大学文学部　教授　稲垣　忠　氏

実践紹介「一枚ポートフォリオ評価（OPPA）を活用した授業の実際について」

講師：埼玉県立春日部女子高等学校　教諭　中谷　勇志朗　氏

ハ　遠隔授業研修会③兼遠隔教育成果発表を実施（**図９**）

期日：令和５年９月７日（木）

内容：遠隔授業参観（田尻さくら高等学校からの配信）

授 業 者　田尻さくら高等学校　教諭　鈴木　歩

教 科 等　理科「科学と人間生活」

対象生徒　中新田高等学校３年

話題提供及び協議

（イ）授業者自評

（ロ）話題提供及び協議

テーマ「遠隔授業における協働的な学びとＩＣＴの活用について」

話題提供者　配信校　田尻さくら高等学校　担当者

受信校　中新田高等学校　　担当者

（ハ）高等教育機関の先生からの指導助言及び振り返り

指導助言　宮城学院女子大学　准教授　舛井　道晴　氏

図９　遠隔授業研修会③兼遠隔教育成果発表の様子
（会場校：中新田高等学校）

ニ　広島県教育委員会の遠隔教育システムに係る学校視察を実施。

期日：令和５年６月１９日（月）広島県教育委員会事務局　学びの変革推進部
高校教育指導課　意見交換
２０日（火）広島県立福山誠之館高等学校視察
広島県立油木高等学校視察
２１日（水）広島県立東城高等学校視察

内容：（イ）広島県での遠隔教育の推進状況・推進体制について
（ロ）管理機関の支援の在り方について
（ハ）遠隔操作システム及び１人１台端末の活用とその実践について
（ニ）視察校における授業参観
（ホ）校内の推進体制について
（ヘ）その他

訪問者：宮城県教育庁高校教育課　主幹　熊谷　　恭
主幹　岡田　康佑
宮城県公立高等学校教員６名（配信校３名、受信校３名）

ホ　受信校活動報告会兼生徒交流会を実施。

期日：令和５年１２月１６日（土）

内容：みやぎのこども未来博ポスター発表会にて、本事業の活動について報告し、また生徒同士で探究活動の内容等について交流。

ヘ　遠隔教育成果発信として特設サイトの作成。

内容：遠隔授業の事業成果及び課題について、特設サイトを作成し、掲載。

URL：https://sites.google.com/gs.myswan.ed.jp/dual-core

2.5. 考察

今年度は、遠隔教育において「主体的、対話的で深い学び」を実現し、生徒の資質・能力の育成を図るため、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に資する実践の在り方を検討することとし、テーマを「遠隔授業における『協働的な学び』の実践の在り方」として調査研究を実施した。また、遠隔授業研修会を全３回実施し、遠隔授業を円滑に進めるための教員の資質能力向上を図った。第３回で実施した話題提供及び協議では、約１年半の実践を踏まえた上で、遠隔授業を実施する上での課題の洗い出しと、有効な実践事例を共有することができた。以下、遠隔授業研修会等で共有された遠隔授業実施に係る主な成果及び課題について示す。（成果：○ 課題：■）

【遠隔授業に取り組む校内の実施体制に係ること】

○　年度初めに遠隔授業を実施するに当たり、確認・検討すべき事項をまとめ、そのデータを担当教員間で共有することで、円滑に実施することできた。（配信校・受信校）

○　教材データの受け渡しや時間割変更などの諸連絡の内容は担当教員だけでなく、遠隔授業担当者も含めた複数の教員で情報共有をし、バックアップ体制を整えることができた。（受信校）

○　受信校に専門の教員がいない中で、専門とする教員からより深い内容の授業を生徒が受けることができた。

○　定期考査問題・解答、課題教材等の紙媒体でのやり取りを減らし、クラウドを用いることで、期間を経ずに共有することができた。

○　生徒は常に生徒１人１台端末環境及びクラウド環境を活用して学習に取り組んだことで、情報活用能力を育成することができた。このことにより、生徒は学習方略を自己選択し、タブレット端末やスマートフォンを活用する生徒、教科書やプリント教材などの紙媒体を活用する生徒など、それぞれが最適と思われるものを活用して、協働して課題解決する姿が見られた。

■　定期考査を実施する場合、問題の漏えいを防ぐことが必要となり、配信校と受信校とで日程を調整することが非常に困難であった。

■　観察、実験や実習などで、色彩の微妙な違いなどをオンラインでは伝えるのが困難であった。対面での授業を計画的、意図的に実施していく必要がある。また、受信校側の特別教室の環境、用具や材料の把握は遠隔では難しく、急にそれらが必要になった際に、有効的に活用することができなかった。

【遠隔授業における授業設計等に係ること】

（遠隔授業における授業設計等全般）

○　生徒１人１台端末環境やクラウド環境を活用した遠隔授業に対応するための、教員のＩＣＴ指導力の向上が見られた。特に令和５年度より初めて遠隔授業を実施する教員は、開始当初は戸惑いも見られたが、次第に「慣れ」ていき、生徒１人１台端末環境やクラウド環境の両者を適時活用しながら、円滑に授業を実施することができた。

○　Google Classroom を活用し、授業の内外で授業者から生徒への課題の指示、生徒から授業者への課題提出したことで、対面での授業と教育的効果に差が生じないように実施することができた。

■　モニター大きさによるが、画面からの生徒の見取りは最前列の生徒以外は不可能であった。課外講習のような比較的少人数で行われるものであれば、専門の教員がいない学校には効果的だと考える。

■　約２０名の生徒が受講した授業では、先生とのコミュニケーションを取りにくいと感じる生徒もおり、遠隔授業の受講人数は１０人程度が適切であったと考えられる。

（各教科・科目での遠隔授業における授業設計）

○　数学Ａの授業では、「Geogebra」を用いた立体図形の学習を実施し、生徒の理解向上に寄与することができ

た。Google classroomにより課題の配信及び提出を行い、実験的に「Slido」を用いて授業内容の理解度を、チャットを用いてやり取りした。また、配信した課題を生徒間の対話による課題解決を促したことで、協働的な学びが進み、生徒の理解も向上した。

○　数学Ｂの授業では、出張等により配信校及び受信校間での時間割の調整ができない場合、自習用の解説動画を作成し、自学できる学習環境を整えることができた。また、生徒一人一人に常に声をかけながら授業を進めたことで、学習への動機付けにつなげることができた。

○　地理総合の授業では、ＩＣＴとの親和性の高いGoogle earthストリートビューや、地理院地図などのＧＩＳを活用し、授業を実施することができた。生徒は１人１台端末を活用することで、それらのアプリケーションを操作し、主体的に学習に取り組むことができた。また、地理を専門とする教員は、小規模校には配置されていない場が多いため、専門性の高い授業を実施することができることも分かった。加えて「地理探究」のような選択科目となり少数での授業が主となる科目でも、実施は可能であると考えられる。

○　科学と人間生活の授業では、訪問での授業と合わせて遠隔授業では実施が難しい観察、実験を行うことで、バランスのとれた授業実践とすることができた。また、動画教材を多く活用し、視覚的にも理解しやすい授業を展開できた。

○　地学基礎の授業では、対面に比べて意図的にペアワークやグループワークを多く取り入れた。１０名という少人数であり、グループ活動を円滑に進めることができた。教員が説明する時間をできるだけ少なくするよう意識し、生徒同士で考え、教え合う時間を多くとるよう工夫し、授業を実施することができた。

○　地学基礎の授業では、双方から書き込みができるホワイトボードと、書画カメラ（教科書や副教材を投影）による映像を常時活用して遠隔授業を進めることができた。ホワイトボードの活用を中心として、双方向性の活発な授業を展開することができた。

○　情報Ｉの授業では、１人１台端末を活用して学習が進めた。同一の課題であっても、生徒それぞれが個別に自分の進捗状況に合わせて課題に取り組むことができるように授業を組み立てた。生徒は、決められた学習時間内で、各自の進度で最適となる学習課程を見つけ出し、自発的に学習が行うことができた。

○　美術Ｉの授業では、１人１台端末を活用し、デジタルで行う表現活動と実際に紙や鉛筆等の彩色用具を利用した表現活動を合わせた学習活動を行うことで学習活動の幅を広げることができた。　また、Googleスライドを用いて授業ごとの制作物を記録しておくことで、学習評価の資料とすることができた。

【学習評価に係ること】

○　情報Ｉの授業では、毎時間ごとに提出課題を設定し、Google classroomを活用して課題提示、回収をした。課題はフォーム、ジャムボード、ドキュメント、スプレッドシート等のアプリケーションで作成した。クラウド環境を活用することで、課題回収や同一形式による評価の効率化、集計に関する正確性や個人情報管理の安全性などが担保できた。学習評価をする際の工夫としては、全ての課題を事前に数値化することにより、評価の公平性等につなげることができた。

■　使用するSaaSが固定化されることで、学習評価を優先した学習内容となってしまうことが挙げられる。

■　教材をクラウドに保存し、生徒がいつでも閲覧できるようにしたり、学習内容をスプレットシートに入力して、学んだことを振り返ることができるようにしたりする手立てが必要であった。

■　パフォーマンス評価を行う場合には協働的な学びの実施が必要となり、それを遠隔授業で行う場合には受信校の立ち合い者の協力が大きいため、専門教科以外の場合、その実施が難しいことがある。

■　定期考査での考査点。単元ごとの振り返りシート及びワークブックなどの提出物を基に３観点で評価したが、評価の材料を増やしていくことが必要である。

■　知識・理解や思考力・判断力・表現力等については成果物や単元別テストによって見取ることは可能だが、主体的に学習に取り組む態度についての評価方法については、継続して検討する必要がある。

【授業者による生徒の見取りに係ること】

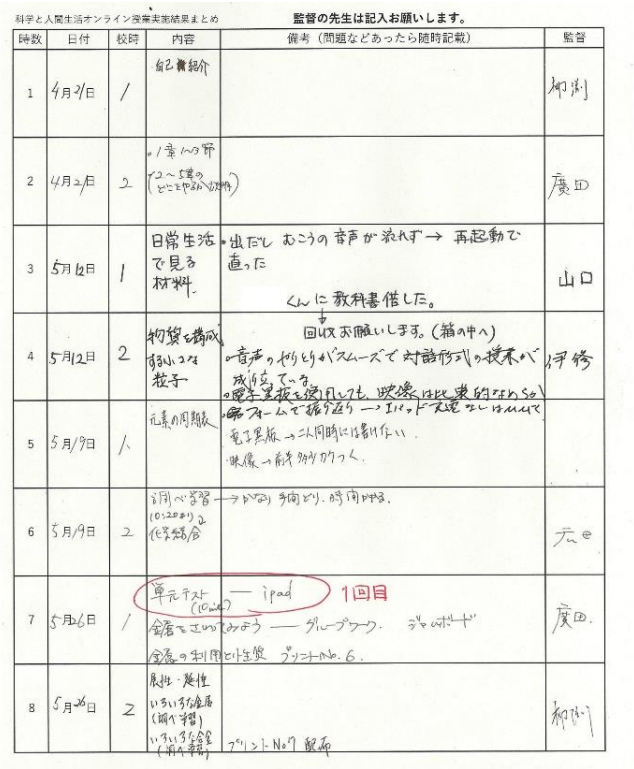
■　生徒が課題に取り組んでいる画面を遠隔で見ることはできるが、タイムラグなどがあり、対面授業で実施している机間指導やそれに伴う個別の指導が満足に実施できない。

【受信校の立ち合い者の役割に係ること】

○　受信校の立ち合い者（実習助手）も生徒と共に学びながら授業に参加したことで、授業改善に関する適切なフィードバックを受けることができた。また。授業終了後も生徒に「どうだった？」と声を掛け、授業者と共有できたことで、生徒の見取りを実施することができた。

○　受信校の立ち合い者として配信授業の教科と同じ教科の教員が立ち会うことで、適宜机間巡視を行い、グループワークを促進させる補助や疑問点や不明点を把握できるようにすることができた。

○　２時間連続で遠隔授業を実施したため、受信校の立ち合い者間の引継ぎや授業者へのフィードバックのため、授業連絡シート（**図１０**）を活用し、通信トラブルも含め授業で起こったことを記録した。この手立てにより、情報共有を密に行うことができた。



科学と人間生活オンライン授業実施結果まとめ　　監督の先生は記入お願いします。

時数	日付	校時	内容	備考（問題などあったら随時記載）	監督
1	4月21日	1	自己紹介		柳瀬
2	4月21日	2	・1学年の時 (2～5班のどこをやるか決める)		廣田
3	5月12日	1	日常生活で見る材料	・出だし おこうの音声が流れず→ 再起動で直った くんに教科書借した。	山口
4	5月12日	2	物質を構成する小さな粒子	回収お願いします。(箱の中へ) ・音声のやりとりがスムーズで対話形式の授業が成立している。 ・電子黒板を使用しても、映像は比較的なめらか。 ・Zoomフォームで振り返り → iPad大変ないはいいで 電子黒板 → 二人同時には書けない。 ・映像 → 前者 分かりやすく。	伊藤
5	5月19日	1	元素の周期表		
6	5月19日	2	1人同じ学習 (10:20より) 2 代表結合	→ ラドンの) 手順どり. 時間がかかる.	左e
7	5月26日	1	単元テスト (10:20) — iPad 1回目 金属を調べよう —— グループワーク. ジャンボボード 金属の生活と生産 プリントNo. 6.		廣田.
8	5月26日	2	長性・展性 いろいろな金属 (調べ学習) いろいろな合金 (調べ学習)	プリントNo.7 配布	柳瀬

図１０　授業連絡シートの記載例

■　疑問点や不明点の把握、学習行動の進捗行動の把握などの生徒の見取りの技術が受信側教員に必要であり、見取った情報を上手に配信側教員に伝えるにも工夫が必要である。

2.5.1. 目標設定シートに対応した成果と課題

2.5.2.

（１）　免許外教科担任制度の活用件数

	２年度（実績）	３年度	４年度	５年度
目標値		０	０	０
実績値	０	０	０	０
構成校の数	３			

○　令和５年度において、情報Ｉを貞山高等学校から柴田農林高等学校川崎校に対して遠隔授業を実施した。このため、免許外教科担任制度の活用件数については、実績値０件であった。

（２）　ＣＯＲＥネットワークの構成校における遠隔授業の実施科目数

	２年度	３年度	４年度	５年度
実績	０	０	５	９
見込み		０	５	９

○　ＣＯＲＥネットワークの構成校における遠隔授業の実施科目数については、令和４年度から４科目増やし、目標値である９科目と同じ科目数である９科目で実施した。具体的な科目は地理総合（２校へ配信)、数学Ａ、数学Ｂ、科学と人間生活（２校へ配信)、地学基礎、情報Ｉ、美術Ｉであった。

○　今年度より新たに実施した地理総合については、配信校での対面の授業形式と大きな変更無く取り組むことができ、教員の iPad をミラーリングして授業を展開した。ＩＣＴとの親和性が高いため、Google earth のストリートビューや，地理院地図などのＧＩＳを容易に利用できることも大きな利点であった。生徒の見取りについて、毎時間ポートフォリオへ記入させ、期の終わりに提出させ、評価や学習の振り返り等に活用することができた。また、定期考査を実施せず、期ごとに２度の単元テストを行い、評価した。評価に関わる単元テストの答案やポートフォリオなどはスキャンされたデータを活用したが、特に不便さを感じることはなかった。

■　課題としては、年度初めの情報共有をスピーディにすることが重要であること、生徒に使用させたいアプリケーションを年度初めにイメージしておくこと、対面授業で操作方法などレクチャーしておくこと、３０名近い生徒の反応をリアルタイムで見取ることが困難であったことなどが挙げられる。

○　今年度より新たに実施した情報Ｉについては、１人１台端末を活用して学習が進め、同一の課題であっても、それぞれの進度に合わせた学習課題となるように授業を組み立てた。具体例としては、プログラムの単元において、基礎課題、標準課題、発展課題を準備し、それぞれが個別に自分の進捗状況に合わせて課題に取り組めるようにした。生徒は、決められた学習時間内で、各自の進度で最適となる学習課程を見つけ出し、自発的に学習が行うことができた。また、学習評価については、Google フォーム、ジャムボード、ドキュメント、スプレッドシート等のアプリケーションで課題を作成させ、全ての課題を事前に数値化することにより、評価の効率化につなげられた。

■　課題としては、使用するアプリケーションに依存しているため、学習評価を前提とした学習内容、課題の内容となってしまうことが挙げられる。生徒が主体的に学習できる課題設定及び学習環境と、評価の工夫の両立を図る必要がある。

○　実技科目である美術Ⅰについては、１人１台端末を活用して、生徒の活動状況をリアルタイムで確認できるアプリを用いて把握し、適時宜声がけや指示を行うことができた。また、１人１台端末を用いたデジタルで行う表現活動と実際に紙や鉛筆等の彩色用具を利用した表現活動を合わせた学習活動を行うことで、学習活動の幅を広げることができた。令和４年度同様にGoogleスライドを用いて授業ごとの制作物を記録しておくことで、評価の資料とすることができた。

■　課題としては、受信校側の美術室の環境、用具や材料の把握は遠隔では難しく有効的な活用はできなかったこと、美術の発展的・応用的な表現の学習活動に限界があること、色彩の微妙な違いをオンラインでは伝えるのが困難であることなどが挙げられる。

（３）　活動指標①：遠隔授業を実施する選択科目の翌年度履修希望者数

	２年度（実績）	３年度	４年度	５年度
実績	０	７	３０	６０
見込み		１０	１５	５５
活動指標の考え方	遠隔授業が行われる前年度における履修希望者数の延べ数を、生徒のニーズに応える教科・科目の提供ができているかの指標とする。			

○　遠隔授業を実施する選択科目の翌年度履修希望者数については、目標値である５５人よりも５人多い、６０人となった。

○　また、令和５年１２月に実施したアンケート調査では、質問項目「興味・関心のある教科・科目を選択することができた。」に対して、８３．２％の生徒が肯定的な回答をした。（**図１０**）

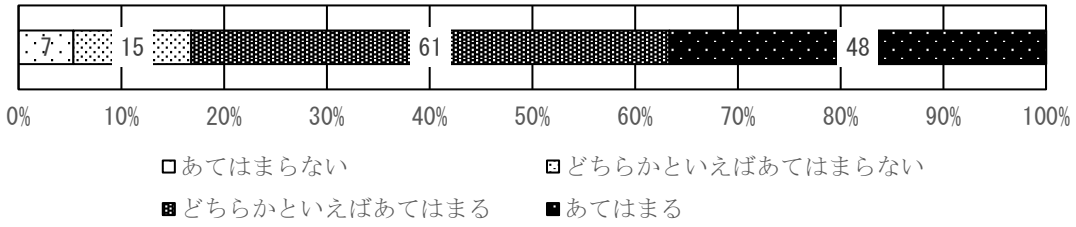


図１０　「興味・関心のある教科・科目を選択することができた。」（n=131 人）

3. コンソーシアム構築による教育の高度化・多様化に関する取組

3.1. 調査計画

令和５年度調査研究事業の実施計画

年　月	実施内容
５年４月	遠隔授業研修会・ＣＩＯ学校訪問 遠隔授業の本格実施開始
５月	第１回ＭＤＣＣ会議 第１回学校コンソーシアム会議（各受信校）
６月	第１回みやぎ探究メソッド研修会（探究活動研修会） 遠隔授業研修会
９月	遠隔授業研修会兼遠隔授業成果発表
１０月	第２回みやぎ探究メソッド研修会（探究活動研修会）
１２月	第２回ＭＤＣＣ会議 受信校活動報告会兼生徒交流会
６年１月	総合的な探究の時間の成果発表会（受信校） 高校生フォーラム発表（受信校の探究活動を発信） 第２回学校コンソーシアム会議（各受信校）
２月	遠隔授業成果発信 第３回みやぎ探究メソッド研修会（探究活動研修会） 第３回ＭＤＣＣ会議

※コンソーシアム構築等に関わる項目については、下線を引いている。

3.2. 実施体制

（１）　岩ヶ崎高等学校

イ　学校コンソーシアムの体制

令和３年度から、岩ヶ崎高等学校が立地する地域の各種団体の長からなる有識者８名（栗原市教育委員会、栗駒鶯沢商工会、岩ヶ崎高等学校ＰＴＡ、栗原市栗駒総合支所、栗駒ロータリークラブ、地域おこし協力隊、民生委員、岩ヶ崎高等学校後援会）及び本校の校長、教頭、事務室長、総務部長、教務部長、進路指導部長、生徒指導保厚部長、総合的な探究の時間の担当者で構成している。

ロ　学校コンソーシアム構築について

各学年の「総合的な探究の時間」の調べ学習や現地調査など、体験等が少ない生徒が自ら立てた問いについてどのように解決すればよいのか、その良きアドバイザーとして学校コンソーシアム委員をお願いして配置した。しかし、生徒の多様な問いや課題の全てについて適切に対応することは難しい。そこで学校コンソーシアム委員８名の人脈から約１００名の各種専門家の方々を「人材バンク」として登録し、生徒の困り事やアドバイスしてほしいことに対応してきた。令和５年度からは、「人材バンク」を「岩高ブースター」とし、各種専門家ばかりでなく対象を広範囲に広げ、双方向での連携をとりやすく改善を図った。

（２）　中新田高等学校

イ　学校コンソーシアムの体制

令和３年度から、県の「学校運営協議会パイロット校事業」におけるパイロット校に指定され、令和３年１１月に学校運営協議会が発足し、地域と協働・連携した教育活動を行っている。本事業における学校コンソーシアムとは趣旨は異なるものであるが、実際に取り組んでいく内容や方向性は一致していることから、令和３年度から、学校運営協議会を本事業における学校コンソーシアムと兼ねることとした。なお、委員長は加美町教育委員会教育長、副会長は加美商工会会長に委嘱している。また、地域との連携をにらみ、加美町役場職員・地元企業・社会教育団体・本校同窓会・ＰＴＡ役員に委員を委嘱し、連携を深めている。

ロ　コンソーシアム構築について

中新田高等学校は、地元加美町との連携を深めていたが、令和４年度入学生から新たな類型制をとり、特に教養総合類型においては、学校設定教科「地域創造学」を設置することとしていた。（令和５年度２学年で実施）本教科においては、「地域産業」「地域スポーツ学」「地域防災学」の３つの科目を学び、地域に貢献できる人材育成を目指すこととしている。「地域創造学」の授業に、学校運営協議会の協力、特に学習内容・講師・活動場所等について協力依頼ができるよう、加美町役場職員・地元企業・社会教育団体等の方々に学校コンソーシアムの委員を委嘱している。多岐にわたる分野へ委員を委嘱しているため、令和４年度は２０名の委員で構成されることとなった。学校コンソーシアムの設置目的・活動の方向性がぶれないよう、第１回学校運営協議会では、「地域社会の発展に貢献できる人材とはどんな人材か」といった内容の熟議を行い、意思統一を図った。専門分野に分かれての部会も開催するなど、各委員からの意見を吸い上げる努力をしている。

また、令和４年度入学生から新たな類型制をとっており、特に「教養総合類型」の２学年には、地域との連携した学校設定教科「地域創造学」を置き、実際に授業が展開されることから、令和４年度より準備を進めてきた。学校コンソーシアムが稼働し始めた昨年度は、「地域創造学」のコンセプトや方向性について議論いただく形であり、委員の活動が見えにくい状況であった。そのため、令和５年度は実際の授業の詳細に関わっていくことをねらい、「第一部会（全国募集・学校魅力化）」「第二部会（地域創造学）」の２つの部会を設け、その活動目的を明確にした。第二部会では、実際の授業展開やその活動内容等に踏み込んだ話し合いを行い、委員がより学校の教育活動に関わりやすい体制をとることとなった。「地域創造学」の科目「地域産業Ｉ」「地域スポーツ学Ｉ」「地域防災学Ｉ」の３つにおいて、授業の講師、生徒たちの見学先、学外イベントでの関わり等、委員の専門分野を生かした活動を担っていただいた。多岐にわたる分野の委員で構成されており、学校コンソーシアムの設置目的・活動の方向性がぶれないよう、令和５年度第１回学校運営協議会では、「魅力ある学校とはどんな学校か」といった内容の熟議を行い、意思統一を図った。

（３）　柴田農林高等学校川崎校

イ　学校コンソーシアムの体制

令和３年度から、「地域と川崎校の連携『実務者連絡会』」兼コンソーシアム会議として、宮城県教育庁高校教育課教育指導班を加え新体制とした。連絡会の会員には、柴田郡川崎町役場（総務課、地域振興課、学務課、生涯学習課、社会福祉協議会）、川崎地域に居住する住民及び川崎地域で活動する団体等（川崎町地域おこし協力隊（SPRING）、特定非営利活動法人（NPO 法人）川崎町の資源をいかす会、特定非営利活動法人（NPO 法人）川崎町・学校サポートネットワーク、・川崎校 PTA）、柴田農林高等学校川崎校、宮城県立支援学校岩沼高等学園川崎キャンパスが参画している。

ロ　コンソーシアム構築について

川崎町は、平成２５年度に宮城県教育委員会から「志教育支援事業」の指定を受けたことにより、「川崎町志１８年教育『学びの架け橋レインボープラン』」が立ち上がり、「かわさきこども園、富岡幼稚園、町内３小学校、２中学校、川崎校」が、幼・小・中・高１８年間を見据え、異校種間の交流や地域交流事業など様々な活動を展開してきた。その後、柴田農林高等学校川崎校が中心となりレインボープランを下地として、令和２年度末に「地域と川崎校の連携『実務者連絡会』」を立ち上げ、川崎町関係各課、地元 NPO 法人等と連携を深めながら、地域の教育資源を活かした更なる教育活動を深めて来た。そして令和３年度からは、本事業の指定を受け、探究的な学びのための学校コンソーシアムとして「地域と川崎校の連携『実務者連絡会』」を拡大しての教育活動を展開している。

（４）　みやぎＤＵＡＬ－ＣＯＲＥハイスクールネットワークコンソーシアム

2.2 実施体制（２）で述べたとおり、事業全体を総括する組織として、ＭＤＣＣを設置した。高等教育機関、行政機関、遠隔授業配信校、受信校が構成する探究の学びのための学校コンソーシアムを構成団体としており、学校コンソーシアムに対して親コンソーシアムの役割ももつ。（**図１１**）

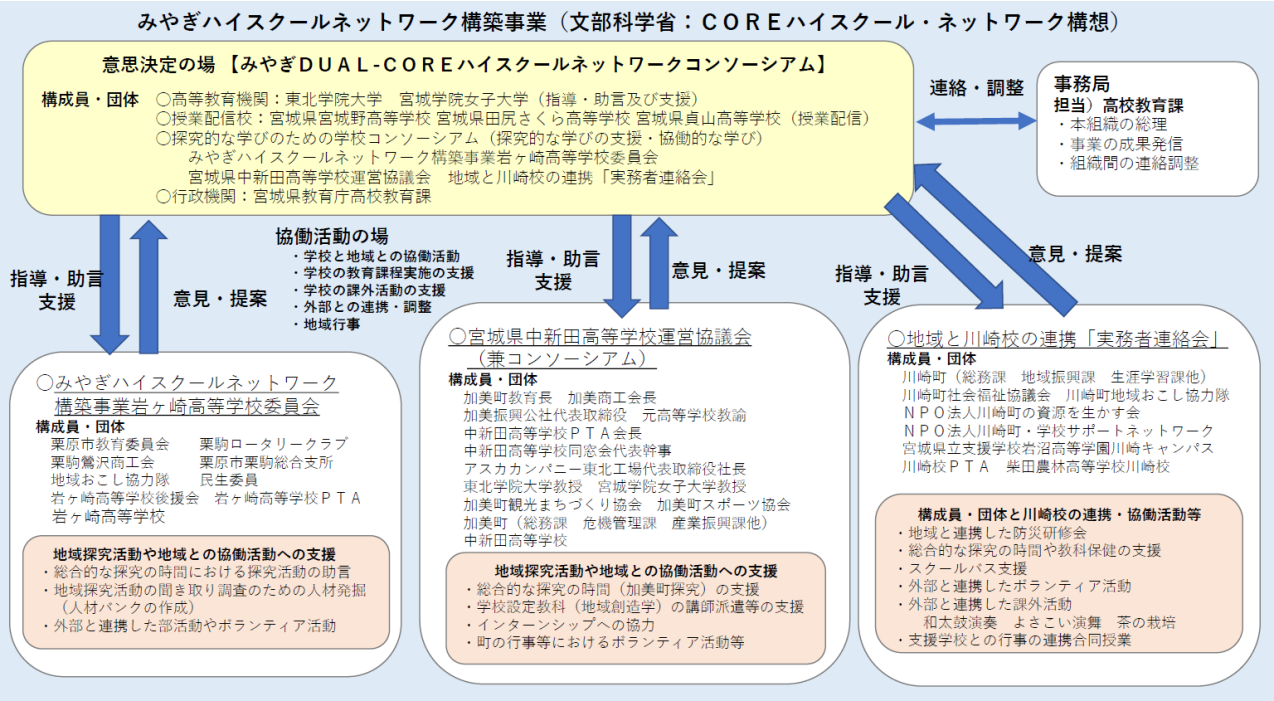


図１１　ＭＤＣＣ全体構成

3.3. 取組概要

（１）　学校間連携を行うための運営体制に関する取組

イ　高等教育機関（大学）、配信校、受信校がつくる学校コンソーシアム、行政機関（教育庁高校教育課）を構成員とするコンソーシアム（みやぎＤＵＡＬ－ＣＯＲＥハイスクールネットワークコンソーシアム）を組織し、連絡・調整会議を３回開催し、学校間連携を図った。

ロ　配信校、受信校の各校を担当する指導主事を配置し、学校コンソーシアムへの参加、学校間の連絡調整、教育委員会と学校間の情報共有を行った。

ハ　Google Classroom を活用して配信校と受信校間の連絡調整を行う体制を整え、各種資料の共有を図った。

ニ　受信校と配信校で互いに教員を派遣し、生徒の実態把握や情報交換を行った。

ホ　みやぎのこども未来博にて、他校の生徒と探究活動及び研究活動の成果や課題について交流を図った。本事業受信校の生徒間だけではなく、SSH 指定校や地域との協働による高等学校教育改革推進事業の指定を受けていた学校等に在籍する生徒とも交流することで、自身の探究活動を振り返り、さらに探究を高度化、自律化させる良い機会となった。

ヘ　高校生フォーラにおいては、「私たちの志と地域貢献」をテーマに各学校で実施した地域探究活動や地域の連携した教育活動についてポスター発表するとともに、代表校発表では中新田高等学校の代表生徒４名が探究の成果を発表し、また全体ディスカッションではパネリストとして岩ヶ崎高等学校の代表生徒が自身の探究活動の成果を基に他校の生徒と討議した。

（２）　市町村、高等教育機関、産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、学校外の教育資源を活用した探究的な学びなどによる教育の高度化・多様化に関する取組

イ　岩ヶ崎高校の取組

〇学校コンソーシアムの活動

・学校コンソーシアム会議　３回実施

・総合的な探究の時間の探究活動発表会における指導助言　４回実施

・探究型学習に係る講演会（１年生対象）　１回実施

※これから「総合的な探究の時間」で課題を立て研究を進める上でヒントになる講話をコンソーシアム構成員である大学教員からいただいた。

・探究力養成講座（１、２年生対象）　１回実施

※これから必要になる探究的な視点をコンソーシアム構成員である大学教員及びゼミ生を招聘し、講話と実践事例を紹介して頂きこれからの学習活動に役立てた。

ロ　中新田高校の取組

〇学校コンソーシアム活動

・学校コンソーシアム会議　６回実施（部会を含む）

・「地域に貢献する人材」についての共通理解

・全国募集の実施

・令和５年度より学校設定科目「地域創造学Ⅰ」(学校設定教科「地域産業学Ⅰ」「地域スポーツ学Ⅰ」「地域防災学Ⅰ」）を新設・開講

・総合的な探究の時間（特に１学年「加美町研究」）の探究活動への協力

・学校評価アンケート結果に関わる検討

ハ　柴田農林高校川崎校の取組

〇コンソーシアム活動

・学校コンソーシアム会議　２回実施

・探究活動発表会　３回実施

・総合的な探究の時間「カワサキクエスト」活動への指導助言

・各連携団体活動

ニ　探究活動研修会の実施

○第１回　期日：令和５年６月２８日（水）

内容：趣旨説明

講師：高校教育課教育指導第二班　主幹　田畑　洋行

成果発表①「カワサキクエストについて」

（地域社会に根ざした高等学校の学校間連携・協働ネットワーク構築事業

(COREハイスクール・ネットワーク構想)）

講師：宮城県柴田農林高校川崎校　教諭　山口　裕之

成果発表②「探究活動を通して成長した資質・能力と、成長を促した活動について」

（ＳＳＨ）

講師：宮城県仙台第三高校　教諭　板橋　淳

情報提供（県内の探究活動に関する情報提供）

講師：生涯学習課社会教育推進班　課長補佐　高橋　亮

株式会社オーナー　代表取締役社長　佐々木　敦斗　氏

ワークショップ「探究を自律化させていくためのテーマ設定とその支援」

講師：認定ＮＰＯ法人カタリバ

○第２回　期日：令和５年１０月２０日（金）

内容：事例紹介・生徒研究発表「探究の取組紹介」

講師：宮城県宮城第一高等学校　教諭及び代表生徒

ワークショップ「探究を高度化させていくための支援」

講師：認定ＮＰＯ法人カタリバ

○第３回　期日：令和６年２月１日（木）

内容：事例発表①「ひがまつプロジェクトについて」

講師：宮城県東松島高等学校　教諭

事例発表②「地域貢献プロジェクトについて」

講師：宮城県佐沼高等学校　教諭

事例発表③「日本史とデータサイエンスを組合せた教科探究」

講師：宮城県仙台第三高等学校　教諭　佐藤　和道

ワークショップ「校内ロールモデルの発見とその活用」

講師：認定ＮＰＯ法人カタリバ

3.3.1. 地域と協働した取組実績

（１）　岩ヶ崎高等学校

①　令和５年８月３１日　第１回岩ヶ崎高等学校コンソーシアム

協議（１）みやぎハイスクールネットワーク構築事業について

（２）地域進学重点校改革推進事業について

（３）本校の「総合的な探究の時間」について

（４）その他

３年総合的な探究の時間の個人研究発表に対して、学校コンソーシアム役員からの指導・助言。

②　令和５年１１月１５日　第２回岩ヶ崎高等学校コンソーシアム

協議（１）今年度の「探究的な学びの実践」について

（２）その他

２年総合的な探究の時間の個人中間研究発表に対して、学校コンソーシアム役員からの指導・助言。

③　令和６年２月１５日　第３回岩ヶ崎高等学校コンソーシアム

協議（１）今年度の「探究的な学びの実践」について～地域の資源と国際交流を生かした探究的な学びの実現～

（２）その他

１年総合的な探究の時間の個人研究発表に対して、学校コンソーシアム役員からの指導・助言。

（２）　中新田高等学校

①　令和５年５月２３日　第１回学校運営協議会

・令和５年度の学校の取組について

イ　スクールミッション、スクールポリシー、学校運営方針について

ロ　　学校設定教科「地域創造学Ⅰ」について

ハ　　総合的な探究の時間について

ニ　　全国募集について

・グループディスカッション

中新田高生が育むべき力（具体的アイディアの共有）

②　令和５年７月１３日　第１回第一部会

・全国募集に向けた生徒募集活動について

イ　オンライン合同説明会

ロ　全国募集向けオープンスクール

ハ　広報活動　等

・「かみ～ご留学生」の生活サポートについて

イ　住まいについて

ロ　食事について

ハ　「かみ～ご留学生見守り隊（仮称）」の活動について

ニ　「かみ～ご留学生」募集スケジュール

・学校魅力化について

③　令和５年９月２８日　第１回第二部会

・学校設定科目「地域創造学Ⅰ」の取組について

イ　地域産業Ⅰ

ロ　地域スポーツ学Ⅰ

ハ　地域防災学Ⅰ

・次年度の学校設定科目「地域創造学Ⅱ」について

イ　地域産業Ⅱ

ロ　地域スポーツ学Ⅱ

ハ　地域防災学Ⅱ

・学校魅力化について

④　令和５年１１月１６日　第２回第一　部会

・全国募集に向けた生徒募集活動について

イ　これまでの募集活動の実際について

・「かみ～ご留学生」について

イ　「かみ～ご留学生」募集について

ロ　「かみ～ご留学生」の生活サポートについて

ハ　「かみ～ご留学生見守り隊（仮称）」の活動について

・学校魅力化について

イ今年度の「地域創造学」の取組について

⑤　令和５年１２月１４日　第２回第二部会

・「地域創造学Ⅰ」の取組について

・本校の「総合的な探究の時間」の取組について

・次年度の「地域創造学Ⅱ」について

・全国募集について

⑥　令和６年１月２２日・２３日　静岡大学・静岡県立駿河中央高等学校視察

⑦　令和６年２月２１日　第２回学校運営協議会

・今年度の取組について

イ　学校設定教科「地域創造学Ⅰ」「総合的な探究の時間」の取組

ロ　全国募集

・今年度の学校運営について～「学校評価アンケート」の分析～

・今年度の学校運営協議会について

・次年度について

イ　令和６年度宮城県中新田高等学校の学校運営方針

ロ　令和６年度学校運営協議会活動計画書

（３）　柴田農林高等学校川崎校

①　令和５年６月１９日　第１回地域と川崎校の連携「実務者連絡会」

（兼）みやぎハイスクールネットワーク「コンソーシアム会議」

議題（１）地域と川崎校の連携「実務者連絡会」の趣旨確認

県教委指定コンソーシアム会議の確認【高校教育課】

（２）令和５年度連携計画について

・資料説明

・令和５年度行事予定等の概要説明

（３）令和５年度「総合的な探究の時間（カワサキクエスト)」の概要説明

・昨年度の取組紹介（動画）

②　令和６年１月２４日　第２回地域と川崎校の連携「実務者連絡会」

（兼）みやぎハイスクールネットワーク「コンソーシアム会議」

議題（１）地域と川崎校の連携「実務者連絡会」の趣旨確認

県教委指定コンソーシアム会議について（挨拶）【高校教育課】

（２）令和５年度連携実施報告及び令和６年度連携計画について

・資料説明

・令和５年度活動実績の様子説明

（３）令和５年度「総合的な探究の時間（カワサキクエスト）」の成果報告

・今年度の取組紹介（動画）

3.4. 取組内容

（１）　岩ヶ崎高等学校の地域との協働による探究活動に関する取組

イ　地域と協働した取組（総合的な探究の時間）

各学年「総合的な探究の時間」を中心に探究的な学びを実施してきた。令和５年度より、地域コーディネーターが配置され、さらに地域と結び付いた実践となった。これらの学習活動を通して、地域の人々と関わる機会が増え、社会への関心を高めることにつながった。また、令和４年度に比べて、ポートフォリオを更新する回数が平均５．３回から平均１５．２回に増加した。生徒が主体的に活動する機会が増加、充実したことにより、活動を振り返ったり、次につなげたりするためには学習履歴を蓄積することが大切であることを生徒が理解したことによるものと思われる。

また、９月１５日に全校生徒に北海道教育大学教育学部准教授・石森広美先生の講義、１月３１日に東京都在住の美術家・タノタイガ氏の講義、２月１３日にフリーアナウンサー・菅原美話氏の講義など国際理解、多角的な視野を持つことの大切さ、コミュニケーションの手法などを学び、自分の問いに対しどのように研究の資料を集めて、どのように自分の考えをまとめ、発表するかを学んだ。

（イ）総合的な探究の時間に係る報告会

・令和５年８月３１日　　３年「総合的な探究の時間」個人探究　最終報告会（**図１２**）

図１２　３年総合的な探究の時間の個人探究　最終報告会の様子

・令和５年１１月１６日　２年「総合的な探究の時間」個人探究　中間報告会（**図１３**）

図１３　２年総合的な探究の時間の個人探究　中間報告会の様子

・令和６年２月１５日　　１年「総合的な探究の時間」個人探究　最終報告会（**図１４**）

図１４　１年総合的な探究の時間の個人探究　最終報告会の様子

・令和６年３月１３日　　２年「総合的な探究の時間」個人探究　最終報告会（**図１５**）

図１５　２年総合的な探究の時間の個人探究　最終報告会の様子

（ロ）令和５年９月５日　国際理解に係る講演会

北海道教育大学教育学部　准教授　石森　広美　氏を講師に、「私たちは世界とつながっている地球市民」をテーマに、身近で具体的なものから世界を見るものの見方や実際の例を紹介し、世界と自分がつながっていることを理解し、視野を広げることを目的に実施した。生徒の対話を促し、考えてもらえるよう、アクティブ・ラーニンング形式で実施した。（**図１６**）

図１６　北海道教育大学教育学部　准教授　石森　広美　氏の講演

（ハ）令和６年１月３０日　探究活動に係る講演会

六日町通り商店街「岩寺」で創作活動を行う芸術家　タノタイガ　氏を講師に、日常における当たり前のことに疑問を持つことで、新たな課題や価値を見いだすことができることに気付くとともに、

多角的な視野を持ち課題解決に向け行動することの大切さを理解することを目的に実施した。（**図１７**）

図１７　タノタイガ　氏の講演

（ニ）令和６年２月１３日（火）　探究的な学びにおける表現講座

岩ヶ崎高等学校出身の六日町通り商店街「岩寺」フリーアナウンサー　菅原　美話　氏を講師に、総合的な探究の時間や授業での探究的な学びにおいて、他者とコミュニケーションを図る際の話し方、伝え方について学ぶことに目的に実施した。（**図１８**）

図１８　フリーアナウンサー　菅原　美話　氏の講演

（２）　中新田高等学校の地域との協働による探究活動に関する取組

イ　地域と協働した取組（総合的な探究の時間）

中新田高等学校では、１学年の総合的な探究の時間において「加美町研究」と題し、探究的な学びを行っている。地域の現状や地域が抱える課題の理解を深め、その分析や解決に向けた方策について学びを深めることを目標としている。令和５年度の活動は、第一段階として、個人の興味関心のある事象を調べ発表すること、第二段階として、関心のあるテーマをグループで、文献等による資料の収集、フィールドワークによる情報収集、解決案の検討、まとめ、発表を行った。これらの活動を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協働的に取り組む態度の育成につなげることができた。

（イ）令和５年９月５日、１２日　個人プロジェクト発表会

自分が興味関心をもっていること、疑問に思っていること、自分の好きなスポーツについて、ゲームについて、音楽についてなど、短期間ではあったが、自分で調べ、スライドにまとめた。作成したスライドを iPad で見せながら、１対１で説明する形式をとったことで、決められた時間内にわかりや

すく相手に伝えるために必要なことを学ぶことができた。（**図１９**）

図１９　個人プロジェクト発表会の様子

（ロ）令和６年１月３０日、２月６日　加美町研究発表会

全１７グループに分かれ、加美町にからめたテーマについて調査研究を実施した。発表に対しては、生徒や教員から多様な質問が出され、懸命に回答する姿が見られた。（**図２０**）

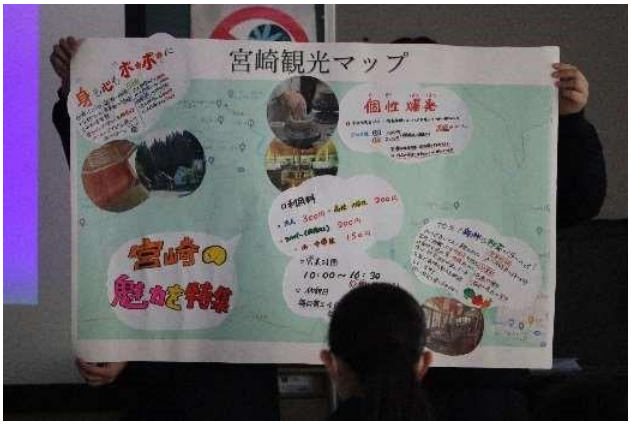


図２０　加美町研究発表会の様子

ロ　地域と協働した取組（２年教養総合類型 地域産業Ⅰ）

学校設定教科「地域創造学」は、加美町全体を学びのフィールドとして、加美町の自然や産業を教材とし、多様な体験学習やフィールドワークを通して、加美町の魅力や地域における課題を見出し、様々な事象やデータをもとにそれらを分析して、考察を深めていくものとして設定している。商工会議所、各事業所、地域の様々な方々の協力により、多角的な視点で加美町の現状と課題の把握に努め、特に、解決方法を探究し、解決策を提案するという一連の学びから、地域社会に貢献する人材を育成している。加えて、自らの考えを目的や場面に応じて分かりやすく表現し、解決の過程を振り返り、主体的・協働的に取り組む姿勢を培うものである。２学年の「地域創造学」では、「地域産業Ⅰ」「地域スポーツ学Ⅰ」「地域防災学Ⅰ」の３つの科目に分かれており、特に「地域産業Ⅰ」では、加美町の産業や町の現状をつかみながら、自ら課題を見つけ、その解決方法を探究し、発信する力の育成を目指した。

（イ）令和６年１月２４日　加美町プロジェクト発表会

加美町関係部署からの５つのミッションについて、調査研究し提言を行った。発表会には、関係部署の担当者および加美町教育委員会教育長、町立中学校２校の校長、学校運営協議会委員等が来場し、その提言発表を聞き、指導助言をいただいた。（**図２１**）

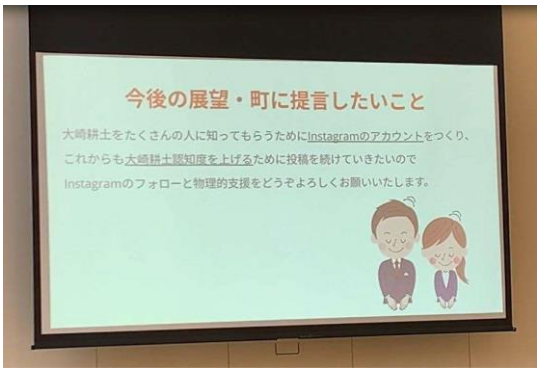


図２１　加美町プロジェクト発表会の様子

ハ　地域と協働した取組（総合的な探究の時間以外のもの）

月　日	内　容	関係団体
令和５年４月２９日	加美町初午まつり（火伏の虎舞） 生徒会役員による清掃活動、有志生徒による交通安全 PR 活動（**図２２**） **図２２　生徒会役員による清掃活動の様子**	加美町産業振興課、加美警察署
６月２４日	宮城・山形「絆」ツール・ド・３４７教養総合類型２年生による大会運営補助ボランティアゴール地点で選手を迎える際に記念品を配付（生徒がデザインしたラベルを貼ったミネラルウォーター）	加美町観光まちづくり協会
７月２３日	第２０回加美町カップ　ドラゴンカヌー大会 カヌー部員による大会運営補助、教養総合類型２年生が大会に出場（１２人×２チームが、一般のチームに混ざって出場し、１位と３位に入賞）　（**図２３**） **図２３　カヌー部員による大会運営補助の様子**	加美町生涯学習課
１０月３日	水難救助訓練加美消防署主催による水難救助訓練（会場	加美消防署、加美警察署、

	は鳴瀬川カヌー場付近）に、カヌー部員と教養総合類型２年生が参加水難者が出た際の実際の行動を訓練した。（**図２４**） **図２４　水難救助訓練の様子**	加美町危機管理室
１０月８日	加美町 SEA TO SUMMIT 2023 教養総合類型２年生による大会運営補助ボランティア参加者が行うアクティビティ（カヤック、ロードバイク、ハイク）のゴール地点で、参加選手への応援も行った。	加美町観光まちづくり協会
１０月２９日	加美町秋まつり生徒会役員によるフリーマーケットのブースを出店	加美町産業振興課
１２月１３日	加美町立鳴峰中学校３年生の「総合的な探究の時間」の発表会に教養総合類型２年生が参加（※参加に向けて準備を進めたが、インフルエンザによる学年閉鎖のため実際には実施できず）　※教育課程内での実施予定	加美町立鳴峰中学校、加美町教育委員会
令和６年２月１１日	うめぇがすと鍋まつり in 加美 ３学年有志生徒が、オリジナル鍋「坦タカ鍋」を販売教養総合類型２年生有志生徒は、スノードームなどを作成する親子イベントブースを運営（**図２５**） **図２５　生徒の活動の様子**	加美商工会

（３）　柴田農林高等学校川崎校の地域との協働による探究活動に関する取組

イ　地域と協働した取組（総合的な探究の時間）

１・２年生の総合的な探究の時間を「カワサキクエスト season３」と題して地域探究に取り組んだ。活動目標は「高校生が川崎町に元気と笑顔を届ける」とした。この目標に向け、１年生は川崎町特産のそばを使った新しいメニューを開発し、レストランに売り込んで商品化を目指し、２年生は川崎町でユニークな取組をしている方々を取材し、動画やリーフレットで幅広く紹介することに取り組んだ。

柴田農林高等学校川崎校では、生徒の実態を踏まえて、総合的な探究の時間を生徒一人一人が課題を

設定して進める課題解決型学習ではなく、チームでものづくりに取り組むプロジェクト型学習（Project Based Learning）として実施している。生徒たちはものづくりの過程でさまざまな問いが与えられ、それらの問いに、文章や作品などの成果物で答えていった。作品をチーム内での発表会や、全体での発表会で何度も発表し、参加者による評価やアドバイスが与えられた。発表会後はその評価やアドバイスを踏まえて見直され、作り直される。週１時間の総合的な探究の時間の枠内では時間が足りず、生徒たちは放課後や夏休み、冬休みなどチームで自主的に集まって課題に取り組んだ。

（イ）令和６年１月１１日　カワサキクエスト 中間発表会

冬休みまでに製作した状況の作品を互見し、よりよい作品にするためにアドバイスし合ったり、講師の方々からアドバイスをいただくたりした。

１年生は、研究開発部、営業部、広報部に分かれて、それぞれが今まで取り組んできた成果を発表した。以下の内容について発表した。（**図２６**）

・研究開発部：２種類のガレットレシピについて
・営業部：試食会のアンケート集計結果について
・広報部：１年間のカワクエ研究概要について

図２６　カワサキクエスト中間発表会（１年生）の様子

２年生は、制作チームから次の２点を発表した。

・見た人にどんな気持ちになってほしいか、何を共感してほしいか？
・リーフレットの見所・ポイント

その後、動画を視聴し、手元にあるリーフレットも読みながらグループごとに話し合いをしてアドバイスや励ましの言葉をプリントにまとめた。（**図２７**）

図２７　カワサキクエスト中間発表会（２年生）の様子

（ロ）令和６年２月１日　カワサキクエスト カワクエ 完成発表会

川崎町長はじめ役場の方、取材に協力していただいた方、講師方、保護者の皆様を招いて作品完成発表会を行った。司会などの運営、発表はすべて生徒が行った。（図２８～３１）

図２８　カワサキクエスト作品完成発表会の様子

図２９　カワサキクエストで作成した Instagram（１年生）

図３０　カワサキクエストで作成したインタビュー動画（２年生）

図３１　カワサキクエストで作成したリーフレット（２年生）

・カワサキクエスト・ホームページ（https://kawasaki-quest.net）

・カワサキクエスト公式 YouTube チャンネル（https://www.youtube.com/channel/UC9lFaEeV0erZ2x7SF9Xjz3A/videos）

・カワサキクエスト season３再生リスト（令和５年度作品）（https://www.youtube.com/playlist?list=PLA8Ut0pgY_C1QhHg_3jInCqJXpz0UjGcS）

・カワサキクエスト Instagram（https://www.instagram.com/kawasakiquest/）

・カワサキクエスト１年生　Instagram（https://www.instagram.com/kawaque1st/）

ロ　地域と協働した取組（総合的な探究の時間以外のもの）

月　日	内　容	関係団体
令和５年５月１８日	第１回防災訓練	岩沼高等学園川崎キャンパス
６月７日	１年：岩沼千年希望の丘植樹活動（**図３２**） **図３２　岩沼千年希望の丘植樹活動の様子** 川崎町スクールバス利用	川崎第二小学校３・４年生、学務課、鎮守の森プロジェクト
６月１１日	支倉常長祭りボランティア希望者６名	川崎町地域振興課
６月１９日	第１回コンソーシアム会議（行事計画）	実務者連絡会
６月２１日	第１回全校清掃活動（町内＋校内）	川崎町役場
６月２２日	生徒会：宮城川崎インターチェンジ環境美化活動１（花壇植栽）	NEXCO 東日本
７月４日	１年：ボランティア清掃活動（**図３３**） **図３３　ボランティア清掃活動の様子**	特別養護老人ホーム釜房みどりの園
７月１０日	社会を明るくする運動（あいさつ運動）（**図３４**） **図３４　社会を明るくする運動の様子**	川崎町社会福祉協議会、民生委員、保護司
７月１１日	１年生カワサキクエスト ガレット試作	地域おこし協力隊 （SPRING）

７月１５日	社会を明るくする運動　生徒会執行部６名	川崎町町長、保護司、民生委員、社会福祉協議会
７月３１日	１年生カワサキクエスト　そば粉活用方法検討会	川崎町の資源をいかす会 地域おこし協力隊 （SPRING）
８月６日	１・２年ボランティア部：川崎茶茶摘み体験（**図３５**） **図３５　川崎茶茶摘み体験の様子**	川崎町学校サポートネットワーク
８月１８日	２・３年ボランティア部：川崎 BG 塾参加（ジュニアリーダー等共同）	川崎町生涯学習課
８月２６日	ボランティア・サマーフェスタ　生徒希望者１３名	社会福祉協議会
８月２６日	川高祭（文化祭）での和太鼓演奏・よさこい演舞 （**図３６**） **図３６　和太鼓演奏・よさこい演舞の様子**	川崎町社会福祉協議会
８月３１日 ※Ｒ６．１．３放映	みやぎふるさと CM 大賞撮影：２年生カワサキクエスト活動と並行活動	川崎町地域振興課
９月１日～５日	２年インターンシップ	各種民間企業
９月１４日 ・２７日	１年生カワサキクエスト　検討会	地域おこし協力隊 （SPRING）
１０月１日	ドリームの郷　秋祭りボランティア：ボランティア部＋有志 13 名	社会福祉協議会、ボランティア友の会、傾聴ボランティア、特別養護老人ホームドリームの郷
１０月１５日	川崎町レイクサイドマラソン　全校ボランティア	川崎町生涯学習課
１０月２５日	１年：植樹活動用どんぐり拾い（青根演習林会場） 川崎町スクールバス利用	川崎第二小学校１・２年生、川崎町学務課、鎮守の森プロジェクト

１０月２６日	全校生徒：ディサービス利用者招待　和太鼓演奏披露・ヨサコイ演舞披露	社会福祉協議会
１０月２６日	生徒会：宮城川崎インターチェンジ環境美化活動２（花壇植栽）（**図３７**） **図３７　環境美化活動２の様子**	NEXCO 東日本
１１月１６日	第２回防災訓練（炊き出し訓練・避難所設営訓練）（**図３８**） **図３８　第２回防災訓練の様子**	川崎町福祉課、社会福祉協議会、ボランティア友の会、ドリームの郷、岩沼高等学園川崎キャンパス
１１月２８日	第２回全校清掃（町内＋校内）	川崎町役場
令和６年１月２４日	第２回コンソーシアム会議（実施報告及び次年度計画）	実務者連絡会
２月１日	カワサキクエスト成果発表会	川崎町長、すべての関係者
２月２０日	カワサキクエスト成果外部発表 ２名	スマイル基金
冬期	生徒希望者８名：スノーバスターズ（雪かきボランティア）	社会福祉協議会
通年①	ボランティア部：デイサービスボランティア（月２回）	社会福祉協議会
通年②	ボランティア部：絵本の広場ボランティア（月２回）	絵本の広場

3.5. 考察

遠隔授業の実施及び学校コンソーシアムの運営等を円滑に推進ことができるように、管理機関が中心となり運営体制の整備を行った。以下、主な成果及び課題について示す。（成果：○　課題：■）

○　各校において、教育課程内外で学校コンソーシアムと協働した教育活動に取り組むことができた。地域人材等の活用や地域をフィールドとした活動が充実し、実社会でも通用するオーセンティックな学びにつながる実践も創出することができた。このような学習に取り組むことで、生徒は自身の取組によって地域社会を変革することができることなどを、実感を伴って理解することができ、資質・能力の育成の他、自己有用感の向上にもつながった。

○　地元自治体による支援や県単独事業により、中新田高等学校、岩ヶ崎高等学校の２校には地域コーディネーターが配置されている。教職員の発想にはない教育活動の実践や地域人材とのつながりができ、学校コン

ソーシアムとも連携することで、生徒が学ぶ環境に厚みができた。

○　約３カ年にわたり、３校にて学校コンソーシアムを構築・運営したことで、学校コンソーシアム構築に係るモデル事例を創出することができた（**図３９**）。本県では、各校に既に設置されていた組織を母体に学校コンソーシアムを構築した。学校コンソーシアム構築に際しては、目的を明確に持ち、その目的を構成団体と共有し、目的に即した活動内容を検討していくことが肝要である。

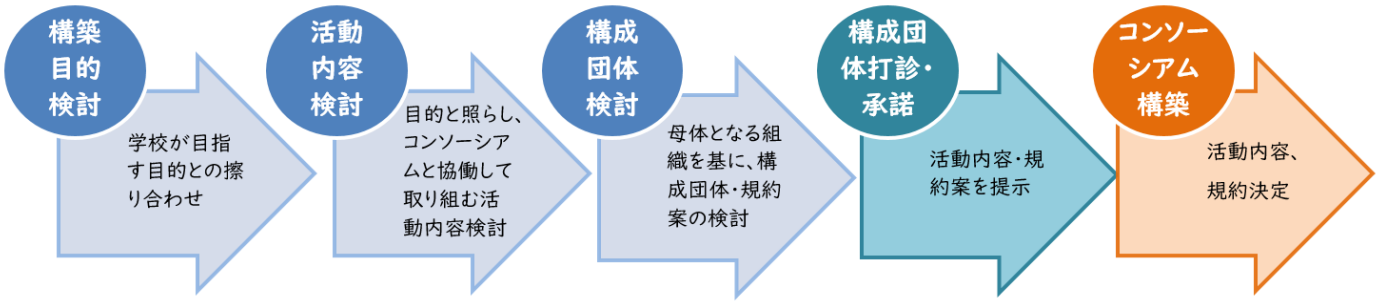


図３９　学校コンソーシアムの構築モデル例

■　学校コンソーシアムとの協働については、総合的な探究の時間や特別活動、学校設定教科・科目が中心となり、他の教科・科目での実践事例が多くはなかった。教科・科目での活用について、引き続き検討を進める必要がある。

■　学校コンソーシアムと協働した各種活動に係る予算の確保について、各種指定事業、補助金等の活用も視野に検討する必要がある。

■　地域コーディネーターの配置に係る継続的な予算及び人材の確保について、検討を継続する必要がある。

3.5.1. 目標設定シートに対応した成果と課題

（１）学びの基礎診断等により把握する生徒の学力の定着・向上の状況

	２年度（実績）	３年度	４年度	５年度
目標値		５５％	６０％	６５％
実績値	５２．８％	５４．３％	６２．５％	６３．６％
把握のための測定方法及び指標	本県で毎年７月に実施する学力状況調査の質問項目「授業が分かる」生徒の割合（受信校の１、２年生の生徒対象）			

○　学びの基礎診断等により把握する生徒の学力の定着・向上の状況については、本県で毎年７月に実施する学力状況調査の質問項目「授業が分かる」生徒の割合を指標とした。質問項目「授業が分かる」生徒の割合は、昨年度と比べて１．１ポイント上昇したが、目標値である６５％よりも１．４ポイント低い、６３．６％となった。令和２年度実績と比べると、１０．８ポイントの増となり、大きく授業改善が進んでいることが窺える。学力状況調査の結果では、授業において探究的な学びを実践している傾向が高いほど、質問項目「授業が分かる」と回答する傾向が高いことが分かっている。このことから、学校コンソーシアムと協働した総合的な探究の時間などで得られた知見を基に、各教科・科目や特別活動、教育課程外での実践につながり、生徒が主体的に取り組むことができるような、授業の質的向上に寄与しているものと思われる。

○　また、教員向けの探究活動研修会を３回実施し、探究の指導について情報交換や、生徒のプレゼンテーションに対して実際に行ったフィードバックへの相互評価を行うことで、探究活動に係る指導力の向上が図ることができた。特に、県内のＳＳＨ校や「地域との協働による高等学校教育改革推進事

業」指定校、「地域進学重点校改革推進事業」指定校などとの横のつながりもでき、探究的な学びに対する情報交換の場とすることもできた。

（２）　地域課題の解決等の探究的な学びに関する科目等の数（総合的な探究の時間を含む。）

	２年度（実績）	３年度	４年度	５年度
目標値		2	2	4
実績値	2	2	3	6

（参考）上記のうち、学校設定科目の数

	２年度（実績）	３年度	４年度	５年度
目標値		0	0	2
実績値	0	0	0	3

○　地域課題の解決等の探究的な学びに関する科目等の数については、目標値である４科目よりも２科目多い、６科目となった。これは令和５年度より、中新田高等学校で学校設定科目「地域創造学」が開講され、学校コンソーシアムと協働した探究的な学びが展開されたことによる。

（３）　地元自治体等の関係機関とコンソーシアムを構築している学校数

	２年度（実績）	３年度	４年度	５年度
実績		3	3	3
見込み		3	3	3

○　本県においては、岩ヶ崎高等学校、中新田高等学校、柴田農林高等学校川崎校のいずれにおいても、令和３年度中に地元自治体等の関係機関と協働した学校コンソーシアムを構築できた。

○　３校ともに、学校コンソーシアムに係る設置規約等を設け、年２回程度の会議を開き、学校と地元自治体等の関係機関とが協働して取り組むことができる教育活動等について、活発な意見交換がなされている。

（４）　活動指標②：コンソーシアム構成機関に出前授業の回数と地域等で実施するコンソーシアム構成機関が実施する諸行事・諸活動へ学校が関わる回数

	２年度（実績）	３年度	４年度	５年度
実績	0	2	６２	７３
見込み		2	8	７０
活動指標の考え方	地域と協働した地域探究活動を推進する際の、地域と学校の関わりについての指標とする。			

○　コンソーシアム構成機関に出前授業の回数と地域等で実施するコンソーシアム構成機関が実施する諸行事・諸活動へ学校が関わる回数については、見込みである７０回よりも３回多い、７３回となった。新型コロナウイルス感染症が第５類に引き下げられたことにより、各受信校において学校コンソーシアムと協働した教育活動の実績数が飛躍的に増加した。

○　教育課程内での学校コンソーシアムと協働した取組としては、例えば柴田農林高等学校川崎校では、総合的な探究の時間での取組に加え、特別活動で小学校の児童と協働で行った「千年希望の丘・植樹活動」、特別老人ホームでの清掃活動、川崎町社会福祉協議会と連携して行った和太鼓演奏・よさこい演舞、防災訓練などに取り組み、生徒の資質・能力の向上に資するものとなった。

○　教育課程外での学校コンソーシアムと協働した取組としては、例えば中新田高等学校では、加美町初

午まつりでの清掃活動（加美町産業振興課、加美警察署）、「宮城・山形『絆』ツール・ド・３４７」でのボランティア活動（加美観光まちづくり協会）、「加美町カップ ドラゴンカヌー大会」での大会運営補助（加美町生涯学習課）などに取り組んだ。生徒が教科・科目等で学んだ資質・能力を活かして、地域住民と協働し様々な課題を実践的に解決するなど、体験的に学ぶことで教育課程内での学びとの相乗効果が得られるものとなった。

■　実施回数が大幅に増加したものの、総合的な探究の時間や特別活動での取組が主となっている。多様な教科・科目においても学校コンソーシアムと協働し、より質の高い教育活動の実施及び「社会に開かれた教育課程」の実現を、継続して検討する必要がある。このためには、学校コンソーシアムと学校の教育目標やスクールポリシーを共有し、学校コンソーシアムとして何ができるのかを、より明確にして行く必要がある。中新田高等学校では、学校コンソーシアムに２つの部会を設け、それぞれ全国募集・学校魅力化、地域創造学（学校設定教科）について検討している。活動目的を明確にすることで、踏み込んだ議論ができ、学校コンソーシアム構成員がより学校の教育活動に関わりやすい体制がとられている。この事例を参考に、学校コンソーシアムとの協働の在り方を検討していきたい。

■　受信校は小規模校であるため、特に教育課程外での学校コンソーシアムと協働した取組に対して、持続的に関わることができるモデル構築の検討が必要である。教員が部活動などへの指導に当たるための時間の確保など、学校側の人的配置や、教員が引率することなく教育課程外で学校コンソーシアムと協働した取組の実施の可否について、検討を続ける必要がある。岩ヶ崎高等学校及び中新田高等学校に配置されている地域コーディネーターの活用状況を精査し、検討を進めていきたい。

4. まとめ

（１）　遠隔授業の実施やその運営体制に関する取組について

イ　遠隔授業を行う体制

令和５年度は、配信科目も９科目に増やし、また配信校を１校追加するなど、事業規模を拡大させて実施した。令和４年度の実践を通して得られた成果を生かすとともに、課題解決を図りながら遠隔授業に取り組んだ。

遠隔授業を配信する教員については、昨年度に引き続き４名の教員が実施する一方で、配信科目の増加に伴い４名の教員が今年度初めて実施することとなった。昨年度、実際に遠隔授業に関わった教員からは、遠隔授業を実施するに当たり対面での授業とは異なるスキルが必要となるとの意見があった。また、本県は令和４年度末に生徒１人１台端末環境が整備されるなど、授業環境も大きく変化した。このため、生徒１人１台端末環境やクラウド環境の活用を前提とした遠隔授業に資するため、2.4 で示したとおり遠隔授業研修会を３回実施するとともに、各配信校でも校内研修会や情報等の共有をし、教員のＩＣＴ指導力の向上等を図った。

また、受信校の立ち合い者に求められる役割等が明確になった。遠隔授業を実施する際、受信校の立ち合い者は要となる存在である。本県での実践では受信校の立ち合い者について、①受信科目を専門としない教員が立ち合い者となる場合、②教員以外の職員（実習助手）が立ち合い者となる場合、③授業連絡シートを活用して立ち合い者間での情報共有を図る場合　の３つのケースが見られた。これら３つのケースには、受信校の立ち合い者に求められる役割として３点の共通事項があった。１点目は、通信トラブルが発生した際に、適切に対応することである。授業に空白の時間ができるだけ生じないようにするために、生徒に指示を出すとともに、予備の通信手段などを用いて授業を再開する手立てを講じることが求められる。ただし、ＩＣＴに詳しい教職員が受信校の立ち合い者になるとは限らないため、年度初め等に通信ト

ラブルが発生した時の対処について、検討しておく必要がある。

２点目は、生徒の様子を記録し、授業者と共有することである。遠隔授業では、授業者は生徒の細かな様子を見取りにくい。このため、学習評価の補助としても共有された記録を活用することができる。

３点目は、授業内外で学習活動に適切に介入することである。授業者からの指示により、生徒がグループ学習などに取り組む際、生徒間の対話が進まないなど、学習活動が停滞することがある。このような時に、受信校の立ち合い者が授業者からの指示がなくとも、適切に介入もしくは支援することで、協働的な学びが促進される。

３点の内、２点目と３点目については、生徒の様子を適切に見取り、介入することが求められる。生徒とラポートを築くことができ適切な支援をすることができれば、教員が立ち合い者である必要はないと考えられる。特に小規模校であれば、教員数も少なく時間割の編成に苦慮することも考えられるため、要件の緩和は必要になると思われる。

ロ　授業づくり・生徒の見取り・学習評価

前述したとおり、本県では令和４年度末に生徒１人１台端末環境が整備された。遠隔授業においてもＩＣＴを効果的に活用し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、主体的、対話的で深い学びを実現し、生徒の資質・能力の育成を図る必要がある。令和４度は生徒１人１台端末環境を活用した取組は限定的なものであったが、今年度は2.5で述べた通り、各教科・科目において生徒１人１台端末環境やクラウド環境を活用した実践が多く見られた。情報Ｉや美術Ｉのように、実習や実技を伴う科目であっても、１人１台端末とクラウドサービスを活用することで、個別最適な学びや学習評価に資する実践も創出することができた。一方で、理科で行う観察、実験については、種類によっては安全管理を徹底する必要がある。このため、受信校で行う対面での授業と併せて実施する等、計画的に実施する必要がある。

（２）　コンソーシアム構築による教育の高度化・多様化に関する取組について

イ　学校コンソーシアムの実施及び運営体制

受信校３校においては、令和３年度に学校コンソーシアムを構築し、それぞれ多様な組織・人材が学校コンソーシアムに参画し、様々な教育活動が実施された。各校においては、年２回以上の学校コンソーシアムに係る会議が開かれ、協働した教育活動の在り方や方向性が活発に議論された。本事業終了後も、学校コンソーシアムを持続可能な体制とするための学校組織や人員配置の在り方については今後も議論が必要であるが、地域との協働性が高い既存の組織の在り方を検討し、再度価値付けることで、目標に合致する取組ができることを明らかにすることができた。これは、地域との接点の多い母体となる組織や地域人材を活用することで、より地域探究活動や地域との協働活動への支援が受けやすく、日常的な協力を得ることができるためだと考えられる。母体となる組織から学校コンソーシアムを構築するモデルプロセスについては、3.5及び**図３９**で述べた通りである。この中でも大切なのは、学校の教育目標やスクール・ミッション等と照らし合わせて、学校コンソーシアムを構築する目的を構成員間で共有することである。中新田高等学校では、第１回目の会議にてグループディスカッション形式で共有を図っている。

また、岩ヶ崎高等学校及び中新田高等学校に配置されている地域コーディネーターのもつ役割も大きなものがあった。地域をフィールドに探究的な学びの充実を検討する際は、地域コーディネーターを計画的に活用するとともに、目的や情報を随時共有することも重要である。なお、地域コーディネーターを継続的に配置するために必要な予算と人材の継続的な確保については、引き続き検討が必要である。

ロ　学校コンソーシアムを通じた教育課程内外の取組

3.5.1（４）活動指標②で示したとおり、学校コンソーシアムと協働した教育課程内外の取組が令和４年

度より大幅に増加した。新型コロナウイルス感染症が第５類に引き下げられた影響もあるが、各受信校において学校コンソーシアムと協働した取組は定着してきたことを示すものと考えられる。岩ヶ崎高等学校では総合的な探究の時間での指導・助言や「人材バンク」及び「岩高ブースター」の設置、中新田高等学校では学校設定科目「地域創造学」の開講や加美町がデジタル人材の育成を目指す目的とする Kami Creative Academy との協働、柴田農林高等学校川崎校ではプロジェクト型学習「カワサキクエスト season ３」の実施や川崎茶育成など、多種多様な教育活動が多くの地域人材に支えられて実践された。

このような取組を持続可能なものとするためには、教員数に関わらず小規模校において実施可能な体制づくりが必要となる。５（２）で述べる地域進学重点校改革推進事業などの推進を通して、引き続き検討を進めていきたい。

5. 次年度に向けた計画概要

（１）遠隔授業に関する計画

本事業で得た知見等を生かし、本県では「教育ＤＸ推進プロジェクト事業（令和５年度から令和７年度）」（**図４０**）を推進している。

教育ＤＸ推進プロジェクト事業は、「ＩＣＴ機器を活用して複数の学校間で授業を共有・補完し、生徒の多様な進路希望の実現に向け、個のニーズに対応する授業を提供するとともに、日本語に通じない生徒や不登校生徒等多様な事情を抱える生徒の学びを保障する」こと、「クラス数及び教員数が限られる県立高等学校間でネットワークを構築し、学校の枠を超えた協働的な学びを実現する」こと、「学習支援ツール等を活用して効果的かつ効率的な生徒の個別最適な学びの推進と学力の向上を図るとともに、教員業務の効率化及び働き方改革を推進する」ことを趣旨とし、令和５年度は、共通教科「情報Ｉ」や「日本語」、「英語ベーシック」などの教科・科目を遠隔授業により配信した。

また、令和６年度においては、本事業の受信校である岩ヶ崎高校、中新田高校に涌谷高校を加え、３校で相互配信による遠隔授業を実施する予定である。

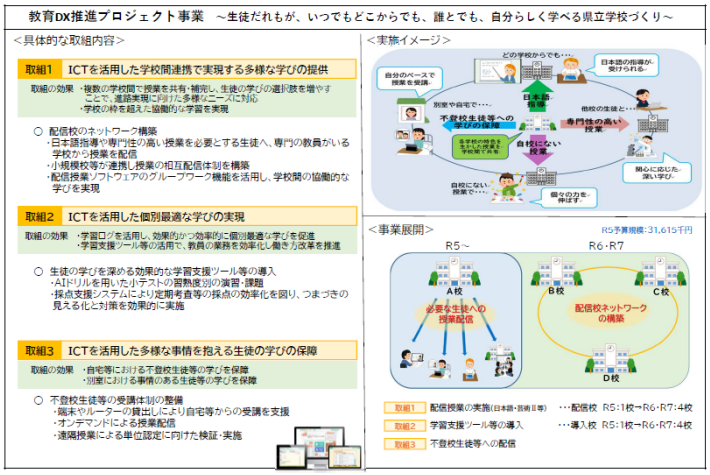


図４０　教育ＤＸ推進プロジェクト事業　全体構成図

（２）コンソーシアム構築による教育の高度化・多様化に関する取組

本事業で得た学校コンソーシアムの在り方や効果的かつ継続的に学校コンソーシアムを運営するための知見等を生かし、本県では「地域進学重点校改革推進事業（令和５年度から令和７年度）」（**図４１**）を推進している。

地域進学重点校改革推進事業は、地域社会が抱える課題発見・解決学習等を通して、学力向上と進路実績の向上を図る事業である。これらを達成するため、「人口減少社会における宮城県内の諸課題に対して地域

進学重点校１０校が連携して政策や解決方策の提案等に取り組む」こと、「１０校のうちの南部・北部・東部の各地区の１校は、改革推進校としてコンソーシアムを構築し、まちづくり等への社会参画や、地域社会と連携して課題解決型の探究活動に積極的に取り組み、生徒が生涯を通して社会課題に向かうことができる資質・能力の育成を図る」こと、「改革推進校３校には、地域コーディネーターを配置し、地域社会と連携した総合的な探究の時間の取組を深めるための学校設定科目の創出を視野に入れた教育課程編成の実践研究を行う」こと、「改革推進校３校以外の地域進学重点校７校はアソシエイト校として、各地区のコンソーシアム構成員となり、コンソーシアムの取組や資源を自校の総合的な探究の時間や各科目の授業改善等に活用するとともに、改革推進校における発表会や教員研修等の機会を利用して自校の教員の指導力向上を図る」ことを趣旨とし、県内を３地区に分割し、各地区に改革推進校３校を指定している。改革推進校では、地区の行政機関や大学等とコンソーシアムを構築する。構築したコンソーシアムと協働して、総合的な探究の時間を中心とした地域探究活動や生徒による政策提言などの教育活動を通して、生徒の資質・能力の育成を図っている。

令和５年度においては、本事業の受信校である岩ヶ崎高校を北部地区の改革推進校に指定し、学校コンソーシアムの活用などの本事業で得られた知見を活かして、種々の教育活動を展開した。岩ヶ崎高校の取組は新聞や教育情報誌などの各種媒体でも大きく取り上げられた（**図４２**）。令和６年度においても、引き続き改革推進校３校を中心としながら、事業を推進していく予定である。

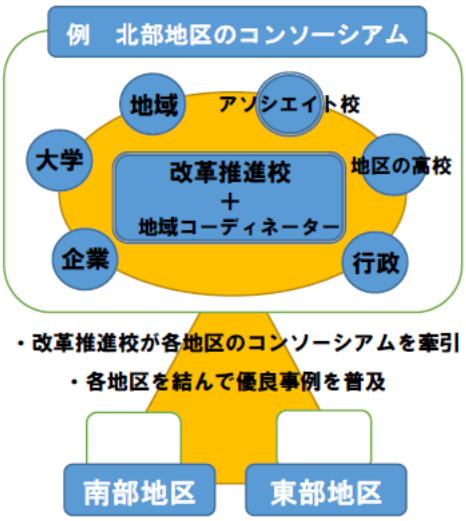


図４１　地域進学重点校改革推進事業　コンソーシアム構成図

図４２　「VIEW next」高校版 2023 年度２月号

特集：学習意欲の向上−学びの志向を捉えて教育活動をデザインする　事例１　より

（出典：Benesse VIEW next ONLINE　https://view-next.benesse.jp/view/bkn-hs/article18500/）

みやぎＤＵＡＬ－ＣＯＲＥハイスクールネットワークコンソーシアム規約

（名称）

第１条　本組織は、みやぎＤＵＡＬ－ＣＯＲＥハイスクールネットワークコンソーシアム（以下「ＭＤＣＣ」という。）と称する。

（目的）

第２条　本組織は、地域社会に根ざした高等学校の学校間連携・協働ネットワーク構築事業（ＣＯＲＥハイスクール・ネットワーク構想）委託要項（令和３年１月５日文部科学省初等中等教育局長決定）に基づき、宮城県教育委員会が文部科学省から委託を受けて実施する「みやぎハイスクールネットワーク構築事業」において、次の目的の達成を目指すものとする。

(1)　県内高等学校における遠隔授業の在り方の実証研究及び地域課題の解決等の探究的な学びを柱とするカリキュラム開発を支援することにより、地域に貢献する人材を育成する。

(2)　前号の実現のために、未来を担う高校生に必要とされる「思考力・判断力・表現力」や「学びに向かう力」の資質・能力を育成するための探究的な学びを推進する。

(3)　本組織に関わる各高等学校が、本県のオンラインによる遠隔授業のノウハウの蓄積や地域と協働した探究的な学びの浸透に寄与するとともに、本県の高校教育全体の活性化を図る。

（構成機関等）

第３条　ＭＤＣＣは、別表に掲げる機関をもって構成する。

（役員）

第４条　ＭＤＣＣには、次の者を役員として置く。

(1)　各高等教育機関から選出された教職員１名

(2)　各授業配信校の副校長又は教頭１名

(3)　各探究的な学びのための学校コンソーシアム内の授業受信校の副校長又は教頭１名

(4)　みやぎハイスクールネットワーク構築事業のＣＩＯ（最高情報責任者）

(5)　宮城県教育庁高校教育課長及び宮城県教育庁高校教育課教育指導第一班長

２　ＭＤＣＣには会長及び副会長を置き、役員の互選によりこれを定める。

３　会長は、コンソーシアムを代表し、会務を総括する。

４　副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代行する。

（事業活動）

第５条　第３条の構成機関は、次の事業活動を行う。

(1)　行政機関は、本組織を総理し、及び事業の成果の発信を行う。

(2)　高等教育機関は、みやぎハイスクールネットワーク構築事業の指導・助言及び支援を行う。

(3)　授業配信校は、授業受信校に対して遠隔授業の配信を行う。

(4)　探究的な学びのための学校コンソーシアムは、各高等学校の総合的な探究の時間等における探究的な学びを支援する。

（会議）

第６条　みやぎハイスクールネットワーク構築事業を連携・協働して実施するにあたり、連絡・調整するための会議を開催する。

２　会議は、ＭＤＣＣ会長が開催し、招集する。

３　会議には、ＭＤＣＣの役員が出席する。

４　会議には、座長を置き、座長は会議の進行を行う。

５　役員が会議に出席した場合は、予算の定めるところにより、宮城県教育委員会講師謝金等支給基準表（平成２４年８月１日改正）、職員等の旅費に関する条例（昭和３２年１０月１０日宮城県条例第３０号）及び宮城県教育委員会に属する職員等の旅費及び費用弁償の支給規則（昭和３６年９月１５日宮城県教育委員会規則第二号）を準用した額により、謝金及び旅費を支給することができる。

（事務局）

第７条　ＭＤＣＣの事務処理等のため、宮城県教育庁高校教育課に事務局を置く。

（その他）

第８条　この規約に定めるもののほか、ＭＤＣＣの運営に関し必要な事項は、宮城県教育庁高校教育課長が別に定める。

附　則

この規約は、令和３年１２月９日から施行する。

附　則

この規約は、令和４年４月１日から施行する。

附　則

この規約は、令和５年４月３日から施行する。

別表（第５条関係）

構成機関	名　　称
行政機関	宮城県教育庁高校教育課
高等教育機関	東北学院大学　　宮城学院大学
授業配信校	宮城県宮城野高等学校　　宮城県田尻さくら高等学校 宮城県貞山高等学校
探究的な学びのための学校コンソーシアム	みやぎハイスクールネットワーク構築事業岩ヶ崎高等学校委員会 宮城県中新田高等学校運営協議会 地域と川崎校の連携「実務者連絡会」